

更に『野鴨』(1884)に於ける寫眞師ヒアルマールの家庭も亦虚偽に基けるものなりき。彼の父エクダムは商人ウエルンと共に森林事業を企て、遂に罪に觸れて牢獄の人となりぬ。ウエルンは獨り法網を免かれて全きを得しが、この報酬によりウエルンの資金によりてヒアルマールは寫眞術を修めたり。彼の妻なるギーナは初めウエルンの侍女なりしが、彼は固より不倫の人なりしを以てギーナとヒアルマールとの間の一女ヘトキグは恐らくはウエルンの子たるに似たり、ヘトキグが今や黒障眼を煩ひつゝあるもの、正しくこれウエルンの悪疾の遺傳にあらざらむや。然れども平凡浮薄にして自ら發明家として偽るが如きヒアルマールは固より此の如き事實を知らず、偏へにヘトキグを自らの子と信じて、この家庭の愛情の上に理想の小天地を實現せむと欲す。ウエルンの子グレイゲルスは獨りこの秘密を知る、即ち今や彼は飄然郷里に歸り理想の鼓吹者としてヒアルマールの偽りの生活を匡むとす。かくてヒアルマールはこの秘密を聞きて驚愕措く所を知らず、彼がヘトキグに對する愛情は是に於て全く失ひ果てぬ、かくてヘトキグ亦自殺し終りて、ヒアルマールの偽りの生活は茲に終りを告げぬ。あゝ、偽りは常に此の如く一切の破滅を以て償れざるべからざる也。

夫れ買はれたる結婚は自由の翹望と共に破滅に終はらざるべからず。然れど

もそは唯に破滅に終るのみならず、イブセンにありては買はれたる結婚の生活は更に罪害なり。唯に罪害なるのみならず、更に苛酷なる遺傳的罪害となりて永へに其子孫に報むずむは已まざる也。これイブセンの信仰の常に猶太教的にして一片の罪過に對しても假借なき責罰を敢てする嚴峻なる正義の觀念に基くと同時に所謂精神界に於けるダルキン主義に外ならず。ブランドの所謂「神は兩親の罪過に對する報むをば尙其子孫の上に及ぼす」人類の罪惡はその最後の者の報むらるゝに到りて始めて已む」とは即ち是也。ペールギントが而かも放逸と夢幻の中に生活したるは全く其父ヨーンギントが自己の富に驕り、黄金の車に乗りて駆け、或は酒宴を設けて放飲を事として、豪奢と豪遊に其生涯を過せしたるに基因せるものにして、即ち遺傳的罪過に外ならず。政治家としてのペールギントなるステンスゴルドの父は廢疾にして而かも放蕩兒なり、而かも其母は不貞不徳なる女にして性情鄙劣を極む。彼が而かも個性の廢滅に了りたるもの、正しく此の如き父母の爲せる罪惡の祟りと云ふべし。

更に『幽霊』(1885)を見よ、ヘレネアーフィングの結婚は固より買はれたるものなり。彼の夫ハウプトマンなるアーフキングは放蕩の酒客にして尤も不道徳を極む。初め夫人は遂に之に堪えず、密かに彼の幼き折よりの戀人なりし牧師マンドルス

の許に逃る、然るに牧師は却て妻の務は夫の批判者たるべからず、あらゆる苦しみに堪えて其夫に仕ふるは婦徳の第一義なるを教えしかば、夫人は再び其夫の許に歸り、所謂現代の宗教道徳の要求の下に偽りの結婚の中に生活したり。二人の間にかくて一男子生る、オスワルドと名づく。父死してより夫人は父の罪惡と不徳が其子の知る所ならむを恐れ、早くよりオスワルドを畫家として海外に遊ばしむ。かくて夫人は力めて父の非行を蔽はむが爲め、豫ねての父の遺志と稱して養育院を建て、強ひて慈善事業を事として世を欺き兼て其子を欺きぬ。オスワルドは固より父に就て何等罪過を知る所あらず、間もなくしてオスワルドは廢疾身に興りて家に歸らざるべからざる身となりぬ。彼れ自らは固より何の結果たるを知らず、而かもそは正しく父の惡徳の應報なるを知らる母のみは獨り之を聞いて愕然として措く所を知らず。オスワルド既に歸るや、家に侍女として美しきレギーネありオスワルド之を見初めて遂に戀の子となりぬ。然れどもレギーネとは實は父アーフリングが不道徳の結果に生れたる子にして、今は唯下婢の名を以て夫人之を養ふのみ、此の如き秘密は夫人獨り之を知る。今やオスワルドは知らずして自らの異母妹に戀して戯る、言を聞きて、夫人は再び慄然として震ひ畏れて曰く「亡き人の魂や出でにし」と。此時恰も夫人が夫の爲に建てたりし養育院は

焼け果てぬ、偽りの上に建てられたるものは永き生命なければなり。此の如くにして夫の爲め將た愛見のためにもと計りし夫人の企圖は、皆悉く破滅に終り行きぬ、見よ、初めて父との關係の秘密を聞きたりしオスワルドは如何なりしぞ。日輪を慕ひ光明に憧れて美と歡喜を求めたりし彼が心も、今や何の力もあらず、父の一切の罪過の報に於て、換言すれば買はれ結婚の間に生れたる子に對する責罰として彼は遂に狂して悶死し終りぬ。以てイブセンが罪惡と偽りに對する苛責の如何ばかり峻刻なるかを見るべからずや。

七

イブセンは此の如く偽りと自己亡失の社會を發いて餘す所なきと共に、此の如き人類の最大罪惡に對して苛責するに於て更に容す所なし。而してイブセンは現世の文明が上下を通じて凡て此の如き罪過の上に成り立つを見たり、彼の十數の戯曲は凡てこれ社會審判の判決書のみ、其悲惨悲痛に溢れ、其陰鬱悽愴に充ち、更に其深刻殘忍を極むる點に於て、多く之に勝るものあらず、誠に之れ最大なる排現世的厭世的天才の憤激と云ふべし。然れども彼が理想の人なるを忘るゝ勿れ、是に於て彼は同時に樂天的天才なりし也。何となれば彼は自らの世界を創りて

その可能を信じ、その出現を豫言したれば也。この理想あるが爲めに彼は光明と歡喜と希望と自由の人たると共に、この理想の邦土を世に建てむが爲めに、先づ一切の世界の虚偽と罪惡との打破を力めたり。何をか彼の理想の邦土と云ふや、所謂「第三王國」これなり、何をか第三王國と云ふや、それは希臘文明と共に基督教文明を容れて智慧と本能を共に肯定するの邦なり、それは美と共に力と光を理想して身心の無垢と其圓滿と其光明の無量を期するの邦なり、それは古の神の世界の如くに意思と行爲と相完きの邦なり、それはロスマルの所謂自己の意思を以て自己を高め自己を潔むる「貴族の人」の邦なり、それはブランドの所謂正義と自由より成りて渾身凡てこれ膽なる新しく強きアダムの邦なり、それはニリダの望みたる自由と自己の責任をのみ要求せらるゝ邦なり、それはストックマンの所謂眞理と自由とによりて建てらるゝ邦なり。之をニーチエの言によりて表せば「超人」の邦なり、ツァラトゥストラの邦なり。誠にこれ古今の大天才の永しに理想となれる所のものに外ならず。若し夫れ一實在が發展して非實在となり、更に再展して新しき實在を融化するの眞理はヘーゲルが教えたる千古の眞理なり、嗚呼「第三王國」の出現は正しくこれ人類最高の歡喜と信仰の下に生れたる永遠の理想に非ざらむや。茲に於てニーチエと共にイブメンは大なる樂天家なり、然れども無能なる基督教の神の許に眠りて

舌を以て理想の出現を僞稱する所謂倫理的樂天家とは甚しく異なる知らざるべからず。彼は唯この王國の出現の爲めに朽ち果てたる現代の破滅を第一義としたり、是に於て彼は即ち折伏の刃を振ひて排現世的詩人となりぬ、嗚呼誰か古き革義に新しき酒を盛るものぞや。

「建築師ゾルネス」を讀め、ゾルネスは實にこの古き世界の代表者也。彼は老衰せり、彼は若き折一寺院の高堂を建て、更に其頂に花環を懸け了りし時滿座の人をして驚嘆せしめたる事ありき、座に列したる小學の生徒に可憐なる女兒ヒルデあり、其タゾルネスが祝宴に招かれたる際、彼は圖らずもヒルデの艶麗端正に心打たれて、熱つき接吻の下に十年の後再び來りて彼女を伴ひ去らむことを約したり、然るに老いたるゾルネスはこの事を既に忘れ果てつゝ、剩さへ利己主義の人となりて青春の人を畏れ妬む事甚だし、畢竟青春は革命を齎らせば也。然るに十年の後ヒルデは彼の約を果さむが爲めに來りたり、否彼女は青春の身を以て老いたるゾルネスに對して革命を興へむが爲めに來りし也。ゾルネス既に老いて又昔時青春の人ならず、高堂の如きは最早彼の建ち得る所にあらず、然かもヒルデは昔時の誓約によりて彼の爲めに一高樓閣を建てむことを迫りぬ、固よりそれは礎石を以て取り圍まるゝものなりき、而してこは實に現實の上に築かれたる理想主義の表號

に外ならず、あはれ老いたる時代の化身なる利己主義のゾルネスは果して此の如き理想世界の樹立を能くすべきか。かくて彼は樓閣を造りしが、昔のその如く高堂の頂に花環を懸くる刹那に目暗みたるまゝ、墜ちて死しぬ、此の如くにしてゾルネスは青春の齎せる革命の爲めに、新しき時代の理想の光に觸れたるの故を以て其實在を終りたり、あはれ老いたるものは新しきもの、前に斃れざるべからざれば也。

思ふに十九世紀の現代は正しくゾルネスなり、新しき革命の時代は即ちヒルデにして既に扉を敲きつゝあるにあらずや、而して之が爲めにゾルネスが魔神を恐れ戦けるが如くに、現代は正しく革命の故に慄ひつゝあるを見ずや。イブセンは畢竟自らヒルデとなりて革命の福音を齎らしつゝ、十九世紀文明を訪づれたるものに外ならず。彼はかくて『ソルネスの死』なる詩に於て偽りと詐欺に充てる現代は正しく羅馬の如く滅びて正義の報ひを甘受せざるべからざるを豫言せり。更に『詩篇の書簡』に於て彼は歐洲を一個の船に譬へぬ、而かも船中の人々が一箇の謎らしき壓迫を感じたるの故に、其精神と意志がさながら不具となりて斃られたるは何故ぞや、人々はこれが爲めに蒼ざめて幽霊の如くなるは何故ぞや、イブセン答へて曰く『船は甲板の上に一箇の屍體を有すればなり』と。而してこの屍體こそ

は即ち『過去』に外ならず、換言すれば十九世紀の文明に外ならず、この屍あるが爲めに、人は凡て自由を失ひ其力を絶たれ意志の活動を損じて天職をも忘却し了りたる也。

イブセンは此の如く現代に於て既に業に文明の崩壊と共に新理想の曙光を見たり、然れどもこの新しき理想の光には現代の人類の凡て堪ゆる能はざるを見たり、何となれば今や人類は祖先よりの虚偽の生活の爲めに深大なる責罰を悔むざるべからざればなり、心靈はよし既にこの光明に歡喜すと雖もこの肉身は遺傳の罪害の代りに捧げざるべからざればなり。『エホバを見るものは死す』とは正にこの悲痛なる真理を表現したるものに外ならず、夫れ神の姿は理想の光なり、神の姿に接するは既にこれ理想界の人たるなり、この刹那や正しく現世の一切の罪害の終りならざるべからず、而してこの現世の一切の罪害の終りは初めてこの遺傳的の肉身を滅ぼして最後の應報を甘受したる後に於て成立すべき也。此の如き崇高なる觀念あるが爲めに、イブセンの戯曲の主人公は多く肉身の滅亡に終らざるはなし、否、一面に於て肉身に於て人類の罪害を具有せざるはなし。ブランドを見よ、彼は愛情も無き家庭の子となりて、峻厳苛酷のあまり彼の母の爲めに棄てられたる最初の戀人の女なるゲルドの爲めに母の仇を受けて射殺せられたり。第三

王國を理想としたるジュリアンは才智あまりありて威力之に伴はず、徒に逡巡と狐疑の中に轉々して波斯遠征の途上に斃れぬ。更に「貴族の人」の教訓を以て理想としたるロスマルは道德堅固の高僧なりしも之に伴ふべき猛烈なる意志の力を缺きたるが爲めに死せり、畢竟彼等は凡て理想の姿を見ればなり、罪の子にしてエホバを見たるものは死すれば也。所謂「我等人類は未だ尙貴族の人の住うべき第三王國に相應せざるなり」とは是なり、然れどもこれ却て理想の勝利にあらずや、歡喜の福音にあらずや。世の漸もすればイブセンの戯曲が而かく破滅に終るを以て彼を以て直に無理想にして矛盾なる破壊的天才と爲すは未だ彼の半面を知らざるものと云ふべき也。

此の如くにして彼は第三王國の豫言と共にこの王國にふさはしき新しきアダムの出現を翹望したりし也。「新しきアダム」とは何ぞや、そは即ち個人主義の化身に外ならず。イブセン嘗て埃及に遊びて其文明崩壞の跡を偲び嘆じて曰く「個人の存在せざる所には人を動かすべき力あらず。憎みあり、愛あり、歎きあり、血あり、更に心あり、かくの如くにして光榮は初めて全からむ。此の如き個性あるが爲めに希臘の神々は今に活く、此の如き個性なきが爲に埃及の神は即ち滅ぶ」と、此の如き個性を體現するは即ち新しきアダムなり、自由と自己の責任と眞理と意

力とは畢竟此の如き個人性の唯一の特権のみ。而して此の如き信仰は彼にありては宇宙の自由なる必然に基く。茲に到りて「第三王國」と「新しきアダム」は正しく文明の進化に基すべき所謂「文明的必然」(Kulturnotwendigkeit)に外ならざるべし、これ實にイブセンが現實的にして理想的たると同時に、厭世家にして又樂天家たる所以なり。

嗚呼イブセンの意義は此の如きものなり、彼は舊き文明の崩壞を呼びて、さながらホーコン王の如く、フヘルクの如く、ブランドの如く、ヘッセルの如く、レベッカの如く、博士ストックマンの如く、ヴェルレの如く、更にヒルデの如く、革命の兒となりて理想の世より飄然として現代に現はれつゝ、新しき理想の豫言者として闘へり。即ち彼の詩作は彼れ自らの自叙傳なると共に、亦實に十九世紀文明の悲惨なる罪惡史なり。これ實にイブセンが世界に於ける永遠の價值と意義に外ならざる也。

三十九年六月

イブセンの『第三王國』

千七百八十年レッシングは『人類の教育』を著はしぬ。これ彼の宗教及び道德に對する深遠なる抱負及び豫言的理想を表示したるものにして其中に云へるあり曰く『完成の時代は確かに來ることあるべし、この時に當りてや人類は己れの行爲の動機をば今日よりも更に善き來世の觀念より最早借り來るを要せざるべし、又この時に當りてや人類が善を行ふは決して律意的の應報の爲めならず、唯に善なるが爲めに之を行ふべし。此の如き完成の時代即ち永しへなる新福音の時代は確に來ることあるべし。思ふに十三世紀乃至十四世紀の熱心者は必ずやこの永しへなる新福音の曙光をば認めしならむ、されども彼等がこの出現をあまりに近き將來に豫言せしは唯その誤りと云ふべき也。逸莫彼等の所謂世界の三種の時代は決して空想にあらざりき、否若し彼等にして新しき團結の古くならざるべからざると共に、且その既に古くなりたるを教えしとも、是れ決して不可なる意見に非ず。然れども唯に彼等が尙小兒の時代をも経過せざりし當代の人々をば、一擧して何等の説明と準備なくして直に第三の時代に相當する成人に爲し得べしと信

じたりしは明かに彼等の短見の致す所なり」と。

レッシングは既に此の如く世に三種の時代あるを假定して、第三の時代即ち完成の時代の將に來るべきことを確信せり。レッシングは所謂啓蒙主義の詩人神學者及び哲學家にして『理性の宗教』をのみ是認して之を以て人道發展の極致となす。

抑も彼は進化論者なり、彼の神は常に創造し發展す、宇宙は即ち此の如く發展し創造せられたるものにして神其のものに外ならず、即ち萬物は悉く神の體現にして所謂限られたる神にして悉く神性を有するは云ふ迄もなし、かくてそは生活し發展し更に精靈を以て惠まる。個人とは畢竟此の如くにして成立す、而してレッシングはこの個人に惠まれたる精靈をば理性となし、理性は道德に外ならずと爲す。かくて個性は發展し向上することに於て益々大宇宙の精靈即ち神に近づきて完全なるを得べし、これ即ち人道なり。此の如く彼は飽く迄で理性を以て神性となし、個人を以て小なる神となし、獨り發展進化の原理を是認したるを以て、在來の基督教の所謂人類の罪の墮落乃至三位一體、贖罪等の觀念を斥けたる結果、宗教の歴史及び人道の將來に對して別種の解釋を施せり。即ち彼は三種の時代を定め、第一の時代を以て猶太教の時代となす、蓋し一神を認むるに於て猶太教は初めて人道の端緒を爲す、而かもこれ畢竟幼年の時代にして條文法規を以て宗教の根柢と

爲す。然れども人類更に進み青年時代に入りて基督教現はる、これ即ち第二の時代なり、この時は知識漸く發達せりと雖も未だ判斷思考力を伴はず。固より猶太教の法規條文は斥けられて人々の啓示を以て第一義と説かれたりと雖も、靈魂不滅の教をば未だ嘗て人類の判斷思考の結果としては教へられざりき。是に於て三位一體罪の墮落説の如き非合理の教訓は尙包含せられたり。今や青年時代を經過して人類は成人の境に入る、是に於て第三の時代來らざるべからず、この時代にありては一際非合理のものは排斥せられ、啓示は正に論推思考と代るべし、人の善を爲すはこれ來世の應報を得んが爲めならず、單にそは善なるが爲めにあり。夫れ舊約全書は第一の時代に適し、新約全書は第二の時代に適す、是に於て第三の時代に適すべき永しへなる新福音も亦現はれざるべからず。レンシングの第三時代とは實に此の如き理想の上に築かれたるもの也。シュレーゲル亦嘗て曰く「新らしき福音は正に現はれざるべからず」と。シルレル又曰く「靈魂不滅の觀念なくして單に道德の爲めに善を行ふの時代は來らざるべからず」と。シリング亦基督教を以て新時代に入るの序論となせり。孰れもこれレンシングの第三時代を理想するもの、これ實に古今の天才の一大信念なりと云ふべき也。

二

千八百七十三年ヘンリック・イブセンは世界史劇「カイゼルとガリレール」を著はして、人類の一切文化の發展の理想に關して更に痛切に「第三王國」の出現を豫言したり。彼はジュリアン師のマクスモスをして言はしめて曰く「世に三箇の王國あり、初めに第一の王國は智慧の樹の上に建てられたり、次に第二の王國は十字架の上に建てられぬ。而して第三王國は祕密の大なる王國なり、そは智慧の樹と同時に十字架の上に建てらるべし、何となれば其は兩者を憎むと共に之を愛すれば也、而して又其生命の泉をばアダムの森と共にゴルゴタ丘上に有すればなり、あはれ第三王國は正に來れり」と。

抑も智慧の樹とは何ぞや、舊約全書の神話の語る所に依れば清く尊きアダム及びエヴが天國にありて尙神と共にありし時は、はしなくも智の魔なる蛇の誘惑に遇うて神の禁じ給ひし智慧の實を竊み喰ひしより、俄かに裸なりし姿を羞らいて相見て木蔭に隠れしが、遂に神の知り給ふ所となり、神の掟を破りたるの過によりてこれより永しへに天國を追はれにき。而かも人文の發展より解釋すれば、これ正しく肉慾の自覺なり、愛情の端緒、官能の是認なり、美の認識なり、享樂の勝利なり、一

言すれば生命の肯定なり。即ち智慧の樹とは本能主義の表標なり。十字架とは何ぞ固よりこは基督の教義に外ならず。あはれ基督の教、そは如何に、生命肯定主義本能主義と異なるよ。そは現代の否定なり、生命の否定なり、この世の物を有するものは天國に入る事能はざるなり。其父兄を棄て其妻子を棄て、今の世の一切のものに剣と戦ひを齎らすものに非らずんば天國に入ること能はざる也、カイゼルの物は之をカイゼルに返せ、そは天國に入らむが爲めに用なければ也、神のもの獨り之を神に返へさるべからず。而して神のものを神に返すとはあらゆる肉のもの即ち生命を棄つるの謂なり。此の如くにならずんば天國に入るべからず、即ちこの世に於ける生命を犠牲にする者に非ざれば以て神の國に入る能はざるなり。是を以て基督の教義は非現世主義なり一言すれば生命否定主義なり。誠に智慧の樹と十字架は正しく兩極的に相反して、相容る可からず。然れどもこの大主義は人文史上の二大思潮に非ざりしか、即ち生命肯定主義は希臘主義として現はれぬ、其處には美と歡樂は其第一義なりき。而して生命否定主義は基督教主義として現はれぬ、其處には眞理と超世は第一義なりき。この背離せる二大主義は實に今日に到る迄で消長榮枯して實に人文史上の経緯を爲しぬ。然れどもこれ等しく人類そのもの、理想と抱負に基けるもの、畢竟これ人類そのもの、要求

に非ずして何ぞ。然らばこの背離せる二大主義が果して同時に要求し調和し融合して新たななる人類の理想となるべき時なき乎、これ誠に吾等の大なる疑問なり。千八百七十年イブセン伯林に遊ぶ時宛も哲學者ヘーゲルの誕生百年祭の舉行あり、新誌界悉く彼の偉大と其學說の崇高を説かざるなし。抑もヘーゲルはレッシングの人道進化發展説を大成完美したるものと云ふべし、彼は先づ社會人文の史蹟に發展の原理を認め、實在は更に非實在となり、これより更に新たななる實在に發展すべきを説く。これ即ち向上進化の原理にしてこの新實在は最初の實在及び之を否定する所謂非實在の兩者即ち矛盾背離せる兩者を抱擁し合蓄し融合し醇化せるものにして全く新たななる實在なり、これ即ち第三の實在なり。イブセンは此時初めてヘーゲルを識るの機會を得て深くこの發展の原理に感激せるに似たり。嗚呼生命肯定主義と否定主義と、即ち希臘主義と基督教主義とは更に合一し抱擁し融合して新しき實在に發展せざるべからず、これ即ち『第三王國』に非ずや。

『カイゼルとガリレール』の主人公ジュリアンはコンスタンチン大帝の嗣なり、大帝は基督教徒なり、彼は初めて基督教を帝國の國教となし、これより希臘主義即ち外道主義は公然否認排斥する所となる。其子ジュリアンに到りては穎智聰明豁達英俊加ふるに哲學者として英雄として誠に千古の天才なり。幼き時は彼は尤も眞

敬虔の基督教徒にして其友アガトンの如きは彼の説教によりて熱心なる基督教徒と爲りぬ。然れども彼の母が夢にアシロイスを生めりと見、醒めてジュリアンを生みぬ、彼は誠にアシロイスの再生ならずや。長じて後彼は漸く自己の中に新たな力を覚え、基督教徒として尙妥如たる能はざりき。幼き時代の信仰は今やさながら夢に似て、彼は即ち疑惑の人となりぬ。適々智慧の教師リバニオスあり、彼は所謂外道なり、ジュリアンに告げて曰く「世に一箇の全くして麗しき世界あり。其處には彫刻の柱の間に常に歡樂の宴あり、髪には薔薇の花かざしつゝ、トリトンの笛の音も清く立ち舞へる幾十の乙女の讚美の歌はみ空に充てり。五彩の橋は魂と魂とを架け渡して、はては遙かなる國の際の光明に達す。あはれ汝等ガリラヤの人は未だ此の如き世を知らず」と。ジュリアン答へて曰く「然れども其處には淨樂無きを如何」と。リバニオス答へて曰く「何をか淨樂と云ふや、原始的事實と相合ふ、これ即ち淨樂に非ずや。さながら雨の滴が海に入り、枯れたる木の葉が生れたる土に融化する、これ即ち淨樂にあらずや」と。これ希臘主義の世界にして其理想なり。ジュリアンはかくて希臘主義に於て新たな福音を見出しぬ、是に於て彼はリバニオスの跡を追ふて希臘のアゼンヌに赴き日輪の崇拜者となり、更に生命の神なるデオニソスの讚美者となりぬ。夫れ希臘主義は生命の讚美なり、美の崇拜なり、歡喜と光明の中に享樂する也、日輪は其唯一の表號也。然れども駟馬に鞭打ちて黄金の車を大空に驅けたりしヘリオスの神は最早我が世に現はれず、太陽は今や一箇の星辰となりて残るにあらずや。あはれ希臘の滅亡と共に神々も亦亡びたるを如何にせむ。リバニオスの教ゆる所のもの畢竟これ書籍の中に葬られたる希臘主義の面影のみ。今の基督教も亦これ書籍の中に葬られたるもの、希臘主義の運命と異なる所なし、是に於て先に基督教を以て満足せざりし彼は更に又希臘主義の師なるリバニオスに懺焉たらざりき、曰く「我は生きざるべからず、今の智識を教ゆる學校はこの生命と何の係る所ぞや」と。ジュリアン即ち曰く「古の美は最早美にあらず、而して新しき真理も亦既に真理ならず」と。是に於て彼は二大主義を共に否定して疑惑の迷霧の中に彷徨す、彼は未だ何處にも理想の光を見ざる也。遂に彼は臆げに理想して曰く「モゼスにもアレキサンデルにも基督にも恵まれざりし美しき女は我にあり、我はこの女性の力にて更に大なるものを創るべし。あはれ手に手を携へてこの美しき人と共に、ヘリオスの生れしてふ東の邦に旅立ち、其處に寂寞の中にヘリオスの神の隠るゝ如くに匿れ潜み、更にユーフライト河の岸邊の森を求めてヘリオスの神をば見出でなむ、嗚呼麗しからずや。茲にこそ美と調和を身に體して新たな人類は世に生れ出づれ、茲にこそ精靈の王國は建

美と調和を身に體して新たな人類は世に生れ出づれ、茲にこそ精靈の王國は建

らるべけれど。これ實に希臘主義及び基督教に超絶したる一大理想の勞弊に非ずや。是に於て神祕派の人マクスモス現はれぬ。ジュリアンに告げて曰く『第三王國は現はれざるべからず、それは希臘主義と基督教を憎むと共に之を愛す、即ち排斥すると共に之を包含し、融化す』と。これ實にジュリアンの豫想したる『精靈の王國』を具體的に論理的に表示したる一大理想と云ふべき也。誠や基督教を棄て、希臘主義を追ひしも誤りなりき、希臘は已に滅びたればなり、真理は即ち兩者を棄つる所にあらず、又兩者の孰れにもあらずして正に兩者を包含したる第三の新たる實在に存すべき也。第三の王國即ち是也。マクスモス又ジュリアンに教へて曰く『地上の王即ち希臘主義の王なるカイゼルも基督教のガリレールも共に没せざるべからず、然れどもこれ滅ぶるに非ず。見よ、小兒は青年となり、青年は更に成人となるに非ずや、而かもこれ少年と青年の滅ぶに非ざる也。汝は青年を以て小兒に立ち歸らしめむとしたり。これ大なる誤りにあらずや。肉の王國は靈の王國に併吞せられざるべからず、然れども靈の王國はこれ最後の者に非ず、さながら青年が最後の者ならざるが如し。あはれ汝は又青年の成人とならむとするを防げんとしたり、これ何事ぞ。青年が成人たる如くに靈の王國は更に第三王國に發展せざるべからざるにあらずや』と。然らば第三王國の帝王は誰ぞや、マクスモス答へて

曰く『これカイゼルの神にして又神のカイゼルなり。靈界に於けるカイゼルにして又肉界に於ける神なり。ナザレの豫言者は云はすや、我は神なり、神は我なりと。神人の合一、萬有と理性の合一はこれ實に第三王國の帝王也、即ちパンに於けるロゴスにしてロゴスに於けるパンなり』と。マクスモス更に教へて曰く『世の葡萄の樹は已に古りにたり、而かも新しき葡萄の房を望む人に向て、尙且つ汝は古きものそれを與へむと欲するか』と。是に於てジュリアンは初めて悟る所あり、げにや第三王國は現はれざるべからず、曰く『凡ての神々は力なくなりぬ、二年の間に我は我世に王たらむ』と。彼は又た波斯遠征の途にて自らの艦隊の焼け失するを望み、叫んで曰く『燃えよ我艦よ、この紅の炎の中に十字架に附けられたるガリラヤの人は灰となりぬ、地上のカイゼルも亦ガリラヤの人と共に焼け失せたり。而かもこの灰より更に地上の神と靈のカイゼルとは一となりて現はれむ』と。此の如くにして彼は第三王國を理想しつゝ、遂に波斯遠征の陣中に傷つきて逝きぬ。

三

抑もく、イブセンは『カイゼルとガリラヤ人』の世界史劇に於て、第三王國の出現を理想したるのみならず、彼は到る處其詩作の中にこの高遠の抱負を表示したり。

彼はトルストイ將たニイチエと同じく現世を排斥し現代の文明を以て根本的誤謬となし、以て今日の社會を以て虚偽となす、「腐塵に蔽はれたる墓場」と云ふもの即ち是也。是に於て彼は更に文明の批評家となり、社會の審判者となり、かゝる虚偽の上に基ける一切の文化を破壊して而して新たな世界を世に創らむとしたり、彼の十數の戯曲及び幾十の詩篇は正しく彼の所謂審判の書なると共に又一大福音に外ならざる也。試みに見よ、『ブランド』に於ては彼は所謂今日の日曜日基督教を排し、愛情によりて成立ちて人を大目に見、爲めに人々が其慈悲に狎るゝ所謂懶惰にして老耄せる今の基督教徒の神を嘲り、且又信仰と生活を異にし、國家の下に興行物の如くに昌ゆる所謂官立の教會を斥け、更に彼は自己の力を消耗し自己を亡失して唯に卑怯の連合によりて盲動する民衆を罵倒し去りて、遂に嚴肅胃すべからざる意力の神、即ち惡に復讐し懶惰と卑怯と逸樂に報めて假借する所なきエホバの神の福音を世に傳へぬ。所謂全き者にして自由なる精靈を體したる「渾身凡て膽にして若く強く新たなるアダム」を創らむはブランドの最後の理想なり、これ實に第三王國を組織すべき新しき人類に非ずや。『社會の敵』の博士ストックマンは所謂豚の群にして痴者の集りに過ぎずして常に自由と真理の敵なる民主主義乃至多數決主義の社會市民に反抗したる結果、遂に『社會の敵』と呼ばれて其家

族と共に排斥せらるゝや、彼は毅然として退く所なし、其幼き子等に向つて曰く「屠屋の學校に行く勿れ、我自ら訓陶して汝等を自由にして優れたる人と爲さん」と。これ實に真理と自由とを體現したる新人にして即ち第三王國の人類に外ならむや。『ロスマルヌホルム』のロスマル曰く「我はこの國の凡ての人を優秀の人となさん、かくて我は彼等の精神を自由にし彼等の意志を清うせむ」と。『優秀の人』とは自由と意志と歡喜と平和と圓滿を身に體せるもの、同じく第三王國の人類に外ならざる也。畢竟美の中に生活し歡喜し、其意志を無限に擴充し、自由を望み威力を欲し、真理の跡を追うて飽くことなく、而して理想に向て昂上し發展するの外何事も知らざるの個人主義の人物はイブセンの最後の理想なり、此の如き理想の實現は即ち第三王國に於て初めて期待せらるべき也。ニイチエの言を借れば「超人」の現るゝ處、これ即ち第三王國なるのみ。

四

然れども希臘主義と基督教主義を抱擁し融合すべき第三王國の出現は獨りイブセンの理想に止らで、誠に今日に到る迄の文明史上の一大理想にあらずや。文明史上に於ても亦明に「古の美は最早美にあらず、今の真理は最早真理に非ず」。試

みに基督教の歴史に見よ、敢て問ふ、今の世に所謂基督自らの説ける基督の教ありや、曰く之れ無し。吾等を以て見れば唯獨りトルストイの説く所誠に基督の教なるなからんや、彼は一切の神學と教條を棄て、直に基督の言行に準據して今の基督教を排し、國家、社會、學問、藝術の一切の文化を斥け、自らカイゼルの物をカイゼルに返して神のものを神に返さんとす、これ大なる基督教徒に非ずや。然るに今の所謂基督教徒はトルストイを以て却て外道となし、謀反人として斥くる事蛇蝎の如し。これ畢竟今の世の所謂基督教は決して基督の教にあらざるが爲めなり。『基督教徒は世に一人ありき、彼は十字架上に死したりき』とはニーチエの言にして眞に千古の鐵案なり。誠や、今の基督教とは歴史的に發展し來れるものに外ならず、二千年の經過の間如何ばかり外道異教の説乃至諸人種の天才的解釋が之を裝飾したりしよ。試みに見よ、人類の罪の墮落説の如き三位一體説の如きマリア崇拜の如きは基督自らの敢て關知せざりし所ならずしか、而かも此の如きは今日の基督教義の支柱とも見るべきものにあらずや。これ等は實に東洋乃至埃及の神話、或は希臘哲學等の影響と解すべき也。更に以太利文藝復興時代のレオナルド・ミケランジェロ、ラファエル、ギドローニ、ムリリョ等の天才によりて基督教は如何に在來の面目を改めたりしか、之れより基督はロゴスを體現したる活ける人格とな

りて尤も崇高を極めたる永しへなる人道の理想となりぬ。マリアに於て理想的愛情の表現を見たるも亦此の時代より始まらざりしか、蓋し死せる條目と冥想に墮落せる神祕派の神學とより基督教を救ひて新たなる人道の生命の泉となしたるは明かにこの時代の藝術の功績と云ふべき也。更に見よ、フランツ・フォン・アッシント、トーマス・フォン・アーキン、ドゥンスコツス、トーマス・フォン・ケンペン等よりルテル、カントに到る迄、日耳曼民族に接觸し其特得の智慧と宗教心に攝受せられてより、基督教は更に崇嚴なる汎神的哲學道德となりしにあらずや。更に人はゲーテの『イヒダニエ』及び『フウスト』を以て基督教希臘主義乃至獨逸民族の道德主義との統合的藝術と云ふにあらずや。誠に今の世に於て基督教と哲學と及び藝術とは離るべからざる也。これ實に基督教と希臘主義乃至印度日耳曼民族の智慧との一大統合醇化とも見るべきと同時に、今の基督教は古の所謂基督の教を更に擴充して異分子を加味したるものに非ずして何ぞや。故に嚴肅なる意義と觀念に依りて解すれば今の人文の中心たる基督教は最早基督自らの教えにあらざる也。然れども人よ、此の如き背離を以て直に今の基督教を非難する勿れ、これ實に人文史上必然の事實にあらざらむや。現世を肯定して而かも彼岸に憧る、此の如くにして理想は初めて吾等の精靈に閃くにあらずや。即ち人文史上の必然なる

は人類心靈の要求の必然なる所以なり。是を以てマクスモスはジュリアンに告げて第三王國を以て『自由なる必然』となせりき。而して『自由なる必然』とは『世界の意志』に外ならず、即ち宇宙の意志、換言すれば神が欲する故に茲に萬事は必然として出現す。第三王國も亦此の如く世界の意志によりて出現すべき也。是に於てマクスモスはジュリアンを戒めて曰く『將に成らむとする第三王國に對して及を向くるは何たる馬鹿者ぞや』と。而して此の如く意志の欲望するは欲望せざるべからざるが故なり、即ち自由なる必然とは必然ならざるべからざるの致す所なり。マクスモス即ちジュリアンの屍に向ひて曰く『欲するとは欲せざるべからざるの謂也。第三王國は正に來るべし。人類の精神はかくてその權利ある所有を要求せむ』と、嗚呼第三王國とは人類の心靈の必然なる要求のみ、即ち文明史上の必然のみ、是は正しく出現せざるべからざる也。

イブセン嘗て曰く『我は信ず、進化論の學説は必ずや精神的な生活にも應用せらるべし。我は信ず、政治及び社會の觀念が今日の形式に存せずして、兩者合一して人類の幸福を規定すべき新しき形式に發展する時代正に來るべし。我は信ず、詩と宗教と哲學が新しき範疇の中に融化し了りて、今日の我等の用うる語もて説き明かし難き一の新しき生命の力と成るの時あらむ。人は屢々我を以て厭世家とな

す、固より我にして人類の理想の永遠なる事を信せざる間は或は然らん。然れども我は亦樂天家なり、何となれば我は理想の進化と其發展を信すれば也。故に我は明に信ず、我等の時代の理想にして破滅し終らんには我等は更に我が戯曲『カイゼルとガリソール』中の所謂第三王國が表示する如き新たな理想に向て努むべし』と。即ち知る、『第三王國』即ち『新しき理想』は誠にこれ吾等人類の尤も崇高なる王冠にあらずして何ぞ。

三十九年八月

海 と 人 生

惱みの人、微笑みの人、美に酔ふ人、戀ひ憧るゝ人は、いかでか海を愛せざるべき。海は人生の姿なればなり。吾等は海を愛す、あゝ吾等は海を愛す。

世開けてより、そも幾千歳ぞや。神も人も野も山も皆、時の黒き鞭に打たれつゝ、散り行く春の花と共に、行衛や何處求むべき術もあらなくに、み空の光普き限り、たい見る洋々の潮のみは、神代變らず荒れて騒ぐよ。あゝ海よ、今も太古の姿なる哉。開闢の初め、國若くして浮脂 (oily and light liquids) の如く漂へる、其姿、學者の教へたる星霧發展の變化により、光輝燦爛赫々蕩搖の火潮を経て正に冷かなる今日の世界に進み來れる宇宙の進化の面影、將た詩人が理想の光に酔うて夢みたりし、際みもあらで、廣さ、高さ、深さを絶し、時と處とを絶したる、太古の冥暗渾沌の世界の跡は、今もこの大なる海に於て窺ひ得へけむ。

あゝ海よ、そは今も神代のまゝなりけり。海を渡りて沖を遙に、トリトンの笛の音をや聞かなむと、啣ちたりし詩人の跡は、いづこぞや。彼れ逝いて久しきに、されども神代ながらのトリトンの笛は、月の夜星の夕、光に寄する潮の波間に響くを聞

かずや。ネライデンと呼ばれにし少女の神々は、今も活く。晨夕、絶えぬ思ひの波となりて、あるは閃く波間の光となりつゝ、あるは西風と共に波立ちながら嘯きつゝ、あるは空行く雲を載せて流れつゝ、どこしへに老いもせて今も美しき少女の神々は海に残りぬ。タウマスは不可思議に充てる海の面となり、フォルキッスとケートーとは恐ろしき凄き物の充ちくゝたる海の底となり、オイリッピアは海の恐ろしき力となり、ネロイスはやがて静けく麗はしく、さながら「詩の如く繪の如き」海となりて、今も變らず今に活きぬ。

あゝかの美しかりしオリュンブの神は、三千年の短き人の思ひを経て皆死しぬ。されども渡津海の神ポサイドンの「世を震ひ動かす」力のみは春に於て秋に於て、光と闇に旋り匿くれて、今も尙潮となりて流るゝにあらすや。よし汚れたる醜き世に神は再び現はれず、彼が手にせし三叉の戈の畏ろしき力は世の稱うるを忘れしとも、浪の底、潮の底に宿りにし秘密の力は、いかでか忘るゝを得べき。知らずや、學者が教えたりし潮汐進化の説 (Prof. G. Darwin's Doctrine of Tidal Evolution) こそは、永しへなる彼が摩訶不思議の力を説けるものなるをや。

海の面こそ今も神代のまゝなるを。試みに巖に上りて遠きを見よ。止むときもなき浪寄せて際なき沖に通ふ潮の姿は、いかに若き思ひを騒がすよ。沖の白帆

の影追うて空に消え行く雲の姿は我世の望みにや似たるべき。更に又紅艶ふその美しき夕日の影を望み、人知れぬ夕暮を浪のみ返る渚に逍遙して、我が來し跡、浮世の姿の今や皆一つの間に消えて行くを詠めつゝ、やがて惱みの沖を遠く遙に思ひ見よ、星の光も幽かなる闇路の奥の潮の音が今も尙「タラッター」の響きと共に轟くを見れば、美しき希臘の神と其人々が悲しみ愁へ憧れし嘆きと思とは、今も變らず、潮の奥に潜み匿るゝ心地ぞする。

げにや海は太古のまゝなりけり。微笑み、頷ひ、げに一切の人生の姿、光榮の歴史、滅亡の歴史、煩悶の歴史、悲哀の歴史は泡と共に其波毎に彩られつ。あゝさらば、夕べは空とぶ星の跡に歎き、今朝は小百合の花に脆ろき命の露を恨みにし若き人よ、さらば又潮卷き返る大洋の邊に憧がれなん。あはれ若き人が熱き胸の奥に閃き渡る奇しき思ひをば、たいかの潮の音のみや説くべけむ。そこに樂あり、歌もあり。知り給はずや、海こそは一切世界の人生を説き明かすべき詩歌なるをや。

二

我等は海を愛す。我等は海の文藝を愛す。浪清きこの海原のほとり、いでや平家を播かしめよ。我は常に平語を愛す。我は常に永しへに若き海に終れる平家

の美しき滅亡を慕ふて止まず。

「故郷をやけ野の原とかへり見て、末も烟りのなみ路をぞ行く。」

沙羅双樹の花影に、祇園精舎の鐘の音と共に人生のあらゆる榮華を夢みたりしは、げにも昨日の夢なりき。淨海の威力消えてより、大勢日に非にして、頽廢の運命潮の如く、闇の如く、悪魔となりて追ひ來るにあらずや。力と及と悔ひと涙と、今何かあらむ。

「昨日は東關の麓に轡を並べて十萬餘騎、今日は西海の波上に纜を解きて七千餘人、雲海茫茫として青天既に暮れなんとす。孤島に夕霧隔て、月海上に泛べり。極浦の波を分け、鹽に引かれて行く船は半天の雲に廻る。日數経れば、都は山川程を隔て、雲井のよそにぞなりにける。遙々來ぬと思へども、唯盡させぬものは涙なり。」

盡さぬはたいに涙なりけり、かくて平家は故郷を棄て、西に走り、命を潮に托したりき。然りそは誠に運命の潮なりき。明日をも知らぬ潮の流れに命を托して、夢なる浪のひゞきを耳にせし時、彼等はもいかに運命の重き歩みを聞きたりしよ。榮華の報ひ今旋り來つゝ、彼等はいかなる運命をも忍ふべきことを自覺せり。戦ひ毎に平家は敗れぬ。彼等皆海を渡りて奔りぬ。かくて一の谷の城塞も破ら

れて後は、一族半ばを失ひて、平家は再び西海に逃れたり。見渡せば海汪々として亂れ騒ぎて、春風迷ふ雲のあとに、たゞ煩ひの思ひを見るのみ。

『汐に引かれ風に随ひて、紀伊の地に赴く船もあり。蘆屋の沖に漕ぎ出て、或は須磨より明石の浦づたい、泊定めぬ楫枕、片敷く袖もしはれつゝ、臚に霞む春の月、心挫かぬ人ぞなき。或は淡路の迫門を押し渡り、繪島が磯に漂へば浪路遙になぎわたり、友まよはせる小夜千鳥、是も我身のたぐひかな。』

風に揺られ波に送られ、はかなき千鳥の跡を追うて、そも何處まで漂はむとせる。潮のまに／＼流れ／＼て、鬼界ヶ島高麗天笠震旦の地迄もと啣ちし彼等の語の、あはれ限りなう悲しくてや。

かくて旦暮漂流の間に春も過ぎて夏となりぬ、夏たけて秋にもなりぬ。雲蕩揺風も無うして木葉下る、耳側れば到る處悲愁のひゞき。變りもやらぬ月かげにのみ、返らぬ昔春の夢、今更に惜しう思はれて、落る涙のうたて繁げき。昔は遂に今ならず、それ逝くものは復還らず。老い行くものやいかにせむ。戦へば即ち敗れ、思へば必涙あり、行けば必逆路の野末あゝ、人生今更に禍なる哉。かくて彼等は迷ひ行きぬ。行衛際なき潮に引かれ風に任せて、何處ともなく揺られ行くこそ悲しけれ。かくて彼等は壇の浦の海上に止まりて、最後の運命と戦ひ争ひしが、滅亡の命運

は最早如何ともすべからず。戦は破れたりや、がて一族は悉く海底に沈みぬ。苦がき浮世を棄てはて、『波の底なる都』求めむとや。哀れなる極みにこそ。此の如くにして榮華の美しき日が秋の雲間に光收めて、永はに歸らず潮のあなたに沈む如く、平家一世の夢も空しくて一切の光榮は水泡と共に消え果てぬ。げにや平家は運命に戦ひて亡びたり。永しなへなる惱みの海あゝ、運命の海はかくて彼等が永はの墳墓なりき。夕べあしたの潮によりて熱つき心のいかに涼しくなるかを、見よ、詩人はかくて永しへの墓を波間の底に願ひにしものを、あゝ我は潮に葬りたる平家の早き死を羨む。

『腹悪き人』とまで恐れられにし俊寛僧都は、潮のあなた、世のあなた、晴嵐夢を破りつゝ、白雪跡を立ちこめにし沖の小島に棄てられて、鷗の聲波の音、たゞ海原に盡せぬ思ひを友としたりしが、これより夢にも通ふ浪のひゞきはいかに彼の真心を鞭打ちけむ。世と人と、成功と失意は、波間の泡によしや似む、されども誠の戀しさのみは現なりけり。なつかしき故郷を思ひ、いとしき兒女を思ひては、彼は今初めて自らを悔むぬ。有王がやがて彼の女の文を携へて、浪路遙々尋ね來し時、いかに彼は愛を思ふて泣きたりけむ。かくて彼逝きぬ。されども潮廻る孤島の中、限りなき愛の洗禮を受けながら、彼の靈は永しへに萬有の愛の海にこそ融けて注げ。

戀に焦れし小宰相の君も遂に此世に得堪えずなりぬ。「昔の人のみ戀しくて、思ひの数は勝るとも、慰むる事」のあらぬ我世に、夢と寐覺めの二つあるこそうたてけれ。遂に彼は舟に上りて、海に向ひぬ。春の夜なれば海は静かにして潮も風もひいさあらで、さながら生と死との一つなるべき夜なりけり。耳側られば「沖の白洲に鳴く千鳥、天の戸わたる楫の音」だゝに哀れさの身に覺えつゝ、かくて彼は静に佛名を念じ終りて、海にこそ沈み給へれ。乳母女房を初め船の者共驚いて其跡を求めしかども「さらぬだに春の夜は、習ひに霞むものなれば、四方のむら雲うかれ來て、潜げどもく、月朧にて見え分かず」かくて彼は美しの命を戀にも似たる惱みの海に永しへに葬りにぎ。

三位の中將維盛卿もなつかしき人々の戀しさに堪え兼ねつゝ、いづれ同じき運命に泣かば、寧ろ戀ひて死なむと誓ひたり。春淺うして彼は屋島を遁がれ、熊野に迷ひ入りて舟に上りぬ。「海路遙に霞み渡りて哀を催すたぐひ哉」。沖も霞に憧るるを見ずや。煩ひ惱むはげに我のみにてはあらざりけり。我に命あり涙あり、浮世の望みいざや棄て、短かき命さらば愛の光に捧げなむ。此の如くにして若き落ち人は潮の底に沈み果てぬ。

斯くて戀に悲しみ、世の憂さに嘆ける人々は永はの休みを皆海の底に求めぬ。

短き人の生命はやがて太古の力と一つになりぬ。悵める彼等若き人々の盡きぬ思ひをば、あゝ今も寄せ來る潮の語るを聞かずや。平家滅亡の影を追ひ、其榮光榮華の夢を旋りし海に於て、吾等は今も尙、憧れ、憐み、煩ひの哀れなる人生の運命の姿を見る也。

三

我は海を愛す。かくてグリル、バルツェルが悲曲「サッポー」に現はれたる海を愛す。人物の配置動作の後景となりし海のいかに雄大と莊嚴と畏怖とに富めるかを見よ。さらばいざ、哀れなる詩人が身を投げて沈みたるロイカデアの岬にも似たらむかの巖に上り、崩る潮の音に和して、暫く「サッポー」を讀ましめよ。

人は屢迷ひたり、「人は何故に生れにしか、人は何處に行くべきか」されどもこは誠にあまりに冷かなる間なりき。吾等已に生きたり、死すべからず。吾等こゝにあり已に彼處にあらず。こゝに暖かなる血と涙と思ひあり。恣まゝに動く所に求めしめよ。活動と享樂とはげに人生の一大事實にして眞理なり。しかもこの二つの力は戀に外ならざりき。

サッポーは女詩人なりき。常にオリンプスの峰に上り、神と共に永遠の生命と

光明に酔ふべき人なりき。されども彼は人の子なるをいかにせむ。かくして彼が自らの胸の中に温かき血汐の湧くを覚えしとき、この世ならざる藝術の道のあまりに冷かなるを思ひたりき。即ち彼は琴を手にして九重の雲深き理想の峰を出で、「鮮かなる生命の花の野」に下りたり。今にして彼は人生の存在は戀にして、戀こそは誠なる生活の意義なるを悟りしなれ。かくて其戀を雄々しく、美しき若きフ・オンに於て認めき。云ひしらず、彼は喜びつゝ、右にフ・オンの手を握り、左に琴を携へて、詩と生命との二つを結びたり。げにも彼は歡呼して、自ら「永しへなる神」にも等しく覺えたりき。

あゝ戀よ、神代變らぬ戀の道よ。されどもこはさながら智慧の實の如きものなりき。そのかげには常に呪ひの蛇あるをいかにせむ。人は戀によりて常に大なる力と智とを得む。されどもこれが爲めに人は屢々生命と理想とを犠牲にせざるべからず。その報ひは即ち悔ると、死と、惱みならむのみ。うたてやサッポーもしかありき。戀の人生ころはげに美しきものにはあらざりけれ。あゝ彼は今樂園よりの永遠の放逐を以て自ら贖はざるべからざる身となりぬ。

彼は戀を覺えてより限りなき苦しみを覺えたり。彼はフ・オンに云へり、
「今我が胸の中に思ひのいかに限りなく浪打つかを、あはれ君は知り給はじ」

戀に亂るゝ思こそ海原のそれなれ。潮は風と亂れつゝ、甘き光りの圓かなる月かげをば、永はに宿すべきためしなきをや。されども彼の苦しみはこれのみにてはあらざりき。

『名譽と光榮のはかなき姿に惑はされて、尊く懐かしかりし人々をも打棄て、行く人こそうたてけれ。脆き小舟に打乗りて、彼はやがて浪高き海原をさへ渡り行く。見渡す限り木もなく、緑もなく、花も咲かで、たゞ恐ろしき灰色の横はるのみ。やがて沖遙かに鮮かなる陸の影を見つゝ、浪のひびきに於て、彼は昔の戀しき人々の聲を聞かむ。かくて彼は再び漕ぎ歸りて、故郷のなつかしき花の野を訪ふ。されども今は昔にあらざりき。時已に春ならず。到る處草枯れ葉落ちて、あゝ美しき花を何處に求むべき』

然り。人生の名譽榮達は誠にかの行く雲の跡よりも淡かりき。詩人が競技に於て得たる神よりの榮譽なるべき月桂の冠の、いまいかに薫なく凋めるを見ずや。たゞそれ青春の夢老い易く、落花再び枝に上らず。限りも知れぬ海原こそ、今も常世の姿なれ。されどもサッポーの悲しみはたゞこれのみには非ざりけり。

げにや一切の世間の法は無常なり。變り易きは若き心よ。世は忘恩に充ち裏切りに充つ、フ・オンは今彼の仇となりつ。彼はサッポーの婢なる若き少女麗し

のメリッタに温き戀を覺えたりき。メリッタも今は彼に背きつゝ、あゝ憎むべき忘恩よ、そは虎よりも狼よりも悪むべき呪ひの蛇なるべき。二人の戀を誓へるを見る時、サッポロはいかに彼等二人を惡みけむ。彼已に我世に下りぬ、是に於て彼は恨みの人となり、復讐の人となり、憤りの人となりぬ。彼は少女の跡を追ひぬ。若き二人は堪え兼ねて海に逃げぬ。狂せるにも似たるサッポロは怒り叫びて、人をして直に二人を捕えしめぬ。

フハオンとメリッタとは捕はれて、今サッポロの前に導かれつ。フハオンはやがて理想の人の使命を彼に向て説きぬ、「げに神と伴なるべき人の、此世に下らば罪せられではいかで止むべき」琴を手にせむ者は已に我世の人ならず。かくてサッポロは悟りたり、「神と人との運命は同じ一つ盃の中にあらず」我世は永はに天ならじ。薔薇の美しさを手折らむとせば、うたでや其刺もて其掌を刺さるべからず。げにも然り、現實と理想と詩と戀とは此處と彼處の別れにして、永はに遇うべき期あらんや。サッポロは悟りぬ。されども彼の悟りや遅かりけり。

哀れなる女詩人は覺りたり。自らの今何處に立てるやを知りたりき。彼の目には涙あり、されど其光は涼しくして、自らの行くべき世界を認むるに鋭かりき。彼の胸は安くなりぬ。この世の一切のもの、戀や、望や、名譽や、今何かあらじ。

「一切の身の眩き金銀の飾り物を掴みて、彼は悉く浪騒げる海に投げ棄てぬ、沈み行く其態を見て、なやましうも思ひ入りつゝ。」

戀も命もはた一切の世の物を否定しつゝ、彼は琴を携へてやがて岬の上に見りぬ。尊い哉彼の姿や。げに彼は神の國の人なりき。彼は靜に祈りつゝ、フハオンとメリッタの手を握りて云ひぬ、「安らげく別れしめよ」あゝ「人には愛神には畏れ」。かくて彼は潮の底に消え去りぬ。遅き死を咎むる勿れ。サッポロはかくて地上を去つて天に上りぬ。なやましき詐りの世を棄て、彼は「尊くも聖なる潮」の中に、永はの休みを求めたりき。あはれ太古のまゝの海の姿よ。老いもなく、變りもなく、永はに若く實在する潮はかくてサッポロの理想と生命の墓場なりき。

我れをして更にフハオンの戀につききて語らしめよ。彼はサッポロをば全く高く天界の人と信じたりき「人には愛神には畏れ」。彼はこれ故に愛せむよりは、神の前に於けるが如くたい尊び敬へるのみ。是に於て彼は愛らしき花の如きメリッタに於て、至醇なる戀を覺えぬ。香ゆかしき薔薇の花蔭に、二つの靈の寄り遇うて温かき接吻と抱きにより、いかばかり二人は天の恵みを覺えけむ。愛の光は二人の世界を結びつけて、生命と力と泉との到る處に湧くを見すや。六合普く光りわたりて、一つ色に艶ふ紅の海の夕日こそ、まさに二人の戀の幸にも較ぶべけれ。フハオ

ンは其タッポーに告げて云ひぬ、

『美しや、此夕暮。夏の夕は今柔かき翅を廣げて静かに花の野に下る。日は沈まむとす。戀の光に渴きながら海原遠く騒ぎつゝ、さながら沈み行く夕日を懐しげに迎ふるに似たりな。風の静に渚に立てる楊の葉蔭に潜むを聞けよ。あゝその風の囁きもさながら『我等凡て戀ひぬ』と呼ばむが如し』

戀はまことに萬有の呼吸する光明なりき。そは尤も尊き生命なり。サッポーが怒りに激してメリッタを遠く放たんとしたりし時、フ、オンも亦激したり。彼は今自由なる若き人なり、何ものか自由の戀を妨げむとはする。かくて彼はメリッタを救ひて、共に舟に乗りて海を逃げぬ。

『こゝに舟あり、力あり、勇みあり、強さあり、何ものか恐れむや。…潮捲き返る海のあなた、遠き故郷のはてを君も見すや、そこに戀あり、休みあり、そこに戀あり、平和あり……いざさらば行け。星なつかしく空に閃き、海限りなく浪立ちつゝ、そよぐや風のいかにゆかしき。いざさらば行け、渡津海の神、戀や守らむ』

サッポーにより、吾等は聖潔にして莊嚴なる海を見たり。而して二人によりて戀の永しへの海を見たり。身や二つ、魂や一つ、同じ一つの戀に酔ひにしその姿は、光りと力と愛との、とはに變らぬ神代ながらの海のそれならずや。

四

我れは海の子バイロンを愛す。我は海の子ドン・ユアンを愛す。雲暗き海の上、嵐に雨に荒るゝ時、月影涼しく海も空も太古の静寂に還る時、君も亦『ドン・ユアン』を讀みて、痛める若き胸に、いかにばかり苦しくなつかしき強さと力の、潮の如く亂るゝかを見よ。

おゝユアンよ。彼は誠に世界苦痛に煩ひはてしバイロン其人なり。あゝバイロンよ。彼は誠に偽善と虚榮と浮華と輕薄に沈溺せし現世の偽文明を破砕せむが爲めに下りたるシブの神なり。彼はげに革命の詩人なり。彼の大なる魔力の語は詐りの平和の夢に自らを忘れにし人々の爲めには、さながら荒れ渡る潮の響なり。彼の詩と彼の生涯は恐ろしき力を集め雄々しき樂の音を置めて、さながら嵐と潮とに渦き返る海なりき。彼の筆は即ちボサイドンが三又戟なり。彼の歩む處、歩みのひらく處、世は驚愕し震駭したり。人は皆怖れ伏しぬ、かくて、天地崩挫の後には、人は更に新しき生命と信仰と希望の世界を認めたり。『ドン・ユアン』の中に現はれたる海は實に此の如くなりき。

ユアンは漂浪夢を追ふの子也。偽りの我世に彼は遂に悲ふべき地を見出さず。

かくて彼は世を逃げて海に逃げぬ。彼は永しへに故郷を去り、愛したりし人々をも棄て、漂浪の海に奔りしなり。

海の上荒れてなりぬ。夜更くるまゝに嵐の惱み急になりて舟搖落限りなく、あはれ強き大濤に打たれては舟底の板割れて、棹も亦奪はれ終んぬ。見るく水は四尺ばかりも溢れ来るをいかにせばや。衣を裂き布を集めて、辛くも間隙を塞ぎて厩に沈没の苦を免れしが、されども嵐強く浪愈々荒くして、長き漂浪の後には、疲れたる上に更に饑餓と争はざるべからず。行く處、風と濤のみ。救ひの舟、救の陸も見えばこそ、恐れと死のみは常に相携へて舟のあたりを脅すのみ。

あらゆる食物と飲料も盡くされぬ。残るは人々と及びユアンの犬とのみ。されども「人は常に死に際しても尙且空腹を惜む」にあらずや、「人は他く迄も活きむことを好む」。而して彼は實に食肉獸なり、彼は鷓の如く吸入を以て生くる能はず、肉によらずむば、以て満足すべからず。やがては人々は虎の如く、沙魚の如く、奪ひ取らずむば已まざる也。かくてユアンの愛犬は屠られぬ、犬喰ひて後、終には静かなる恐怖の間に、鬮を配して喰はるべき人は撰ばれたり。かくて人々は、生きながら餓鬼道の畜生となりて生ける血と肉とを食りぬ。外にはたゞ風と浪との荒れ騒ぐのみ。

あゝ死と恐れ影のみ黒き海の上よ。そは誠に偽善の飾りを取り去りたる現世文明の本體に外ならじ。人は善を云ひ、理想を云ひ、博愛を云ひ、神の名を云ふ。されどもそは己が小醜との穢れを蔽はむが爲めの衣なるなからんや。試みに彼等が道德を云ひ現はすべき言語を去れよ、彼等の心中たゞ生慾獸的の本能活動あるのみ。水泡のかけ、雲の行術は善悪の名といづれぞ、何ぞ消え易きの速かなるや。闇の奥、光の奥に、潮と共に吾等はたゞ本能の活動の永しへなるを見る。

やみ黒き海の上を、船は尙行術も知らず漂ひ行きぬ。人は多く死に失せたり。飢き、餓え、失望、暑さ、寒さの中に煩ひて、氣も心も將に失せなむ其時に、うれしやユアンと残りの人々は遂に陸の近きを見たり。風もゆかしく吹き初めて、舟は其島に向ひて走りぬ。かくて岩に上らむとき、打返す大浪に舟忽ち覆りて、あはれや三つの身は波間の底に隠れたり。やがて真砂の上に打上げられしとき、たゞユアンのみ島守の少女に救はれて、辛くも蘇み返りぬ。

海賊なるこゝ島守の少女ヘーデは彼を救ひぬ。偽りの世を遠き島かげに生ひ育ちて、潮と風とのみ、太古のまゝの人の思ひを辿りにし少女ヘーデは彼を救ひぬ。あゝ柔はき手と微笑み温き唇と目さしを以て、深く眠りし美しのユアンを抱いて少女ヘーデは復新しき生命を彼に與へぬ。少女はユアンを救ひたり、されど

ユアンも亦少女を寂びしき物思ひより戀の光の新たなる世に救ひしをや。

少女は希臘人の子なり。ユアンは彼の語を解せざりき。されども情を解くべき心は常にあり。微笑みと涙と太息と目ざしのみはげにもこよなき確かなる若き思の語なれ。ある夕暮なりき。二人は相携へて静かなる島のあたり渚のほとりを逍遙しぬ。道なき森かげ、そこには喜悅あり。さびしき磯、そこには歡樂あり。それは静けき夏の夕なりき。岩高きあたり、今日は浪なく潮行みて、雲もなき空の静けき海のはては、さながら大なる湖にも似たりな。いづこ浪間の濱千鳥、千鳥の聲のみぞ覺めて聞ゆる。日沈みぬ。あゝ世を離れ、人を離れて、戀のみなるこゝ島の上。見渡せばたゞ静かなる海の面、仰ぎ見れば、千里や飽る夕の空。見よ、その空のあなただひそかに星のかげ一つ、閃き初むる。

かくて二人は岩窟に入りて憩ひぬ。ふりさけ見れば、遙か、今夕映の紅燃えて空悉く紫蘭の色に輝きつゝ、映りて彩る海の上の今更に麗はし。風ひく、戦ぎて、夢なる海の潮の音を夢又夢と思ひしまに、月静にさし上りぬ。銀の光の更に夢より淡き影を布くとき、融けたらんやうに二人の唇も近づきて一つになりぬ。あゝ長き接吻よ。

若さと美と愛と、知と心と感覺と、あらゆる生ける人の情の融けて合ふべきその

接吻よ。語を絶し思ひを絶して、たゞ青春の夢の人のみ味ふべき其接吻よ。あゝ其意味をば、たゞ神のみや知り給はむよ。

夜深うして月高うなりぬ。海も静か、み空も静か、潮も静か、風も静か、恐れも人も嫉みもなきこの静かなる磯にたゞ、かしこには月の光、こゝには戀の思のみ。あゝ天も地も、二人の魂も今は一つとなりて戀と月かげに融け合ふを見ずや。されども二人は詞なかりき。偽りの世に行はるべき誓ひを、彼等敢て爲さざりき。この信とこの月と、この海とこの静けさは、永はに變らぬ二人の戀のこの上もなき證據なるをや。

されども二人は幸薄かりき。ヘーデの父は歸り來ぬ。二人は鞭打たれぬ。二人の戀はさながら落花の如く脆く散りぬ。ユアンは逐はる、哀むべきヘーデ獨りこゝに残りて、遂に戀ひ焦れてこの荒海の島に死しぬ。げに脆き命の戀なりしよ。されどもヘーデは戀の中に生きて死にぬ。『よし戀は自らの裁きの神とならむとも、罪ある子を又贖ひ救ふべきものは、げにその戀ならずや』人の世遠き島の上、彼の初めて戀ひて死せし遊り、變らぬ戀の標示となりし潮と星とは、そもいつ變る時あらむや。ユアンは行術も知らず、復迷ひ行きぬ。されども二人の戀は潮と共に今も尙若かりけり。

かくて吾等は海のドンニアンを讀み了りぬ。嵐の海靜かなる海めぐりて盡きぬ其潮の音に、吾等は實に神代ながらの幸なるべき人生本然の生慾の美しき活動と至醇なる情緒を見たり。あゝ神代ながらの誠なる恵みは常に海と共に若く残りぬ。

五

吾等は海を愛す。吾等は、ハイネを愛す、彼もバイロンの如く海の子なれば也。絶えもせぬ愁と戀を胸に包みて、年若うして彼は北海のほとりに逍遙ひつ。彼の海の歌即ち成りぬ。

寂しき潮のみ返る渚に、明け暮れ世を離れ人を離れて、あるは岡に上り、あるは岩に攀ぢ、あるは汀に立ちつくしつゝ、遠くあなたの空と海とに思ひ入りし時、いかに彼の心のあやしうも轟きしよ。風に亂る雲の跡絶ゆるまもなき浪のかへるさ、沖通ふ白帆のかげ、夕に啼く鷗の聲に、彼は海に潜みたる一切の莊大と秘密とを辿りたり。かくして嵐の夜、月の夜、星の晨に一なるべき海原に、彼は平和と休みと忘却と希望と過ぎし悲みと美しき面影と、且は惱み、失望、凡て一切のあらゆる人生の思を辿りたりき。彼は常に海と共に歌ひたり。彼の詩こそ、げに雄大を集めたる語

の海なれ。「我は自らの心の如くに海を愛す。海はげにも我心なるらん」これ誠にハイネ自らの詞なりき。

彼嘗て美しき蟹の少女の手を握りて歌ひぬ。

「かのあれ騒ぐ海にも似て、我心にも嵐あり、干沙あり、満潮あり。おゝ戀よ、美しき眞珠となりて其底にあるを見ずや。」

恨みもあり、歎きもあり、惱みもあり、戀もあり。げに彼の心は海なりけり。

嘗て彼又静けき月の夜半、眞白き波寄する渚に獨り立ちぬ。夜は長し、月かげは隈もなし。沖に潜む波の音はさながら酔うて歌ふに似たり。彼の心は夢の如くなりて、彼ははや波間には海の女神の躍るを見つ。彼歌うて叫びぬ。

「美しの女神よ來れ、身と心とを我は捧げむ。君が歌と胸と腕の中に、さらば安らげく我は眠らむ」

かくは彼は月夜の秘密、波の秘密を證したりき。

又嘗て夕暮碧濃き海原の邊、彼は思ひなやみて立てり。日は沈みはてつゝ、海の上に残れる夕映の艶にや酔うて、潮のみ尙も打騒ぐ。彼は耳側てしが、はてはその潮のひびきに嘯き、嘯き、笑ひ、咳き、嘲り、太息き、あらゆる現世の聲と共に、又昔覺えし歌も聞きぬ。かくて昔隣り家の少女と遊びにし幼き夢をも思ひなつかしみて止

まざりき。あゝ波の音は懐舊の夢と幼き歌のひびきのそれなりき。

嘗て彼又夕渚に立てり。彼の胸は海の如く、なやましく波立ちて止まず。際なき空に憧れつゝ、彼はなつかしき故郷を想ひいでぬ。更に愛したる人の面影、はては波の音の響く間に、たゞかの人の妙えなる聲を聞くのみ。戀しさに絶えかねて、彼は杖を取りて戀しき人の名を沙の上に書きぬ。うたてや波の寄せも来て、あゝ麗しき其戀人の名も消えて去りぬ。戀しき憧れ、煩ひげに浪は愁重げき思ひなりけり。

嘗て星の夜半獨り、彼は舟に上りて思ひたり。戀人の戀の光の目にも似たらむ星の、いかに美しう閃くよ、彼の誠なる戀もしかなりき。彼歌ひぬ。

『海には眞珠、空に星。我心、あゝ我心には戀の光。海は大なり、空は大なり。されど我心は更に大なり。星や麗し、眞珠や麗し。されど我戀の更にく麗しく輝くを見よ』

嘗て又彼は舟の欄によりて、來し方思ひつゝ、鏡の如く輝ける海を見たり。彼はさながら夢みつゝ、流れて返らぬ波の底遙かく、大なる都を見たり。高き寺院の塔も見え、集ひ來る人の群、鐘の聲、讚美の歌も手に取るばかり。かくて現つながら夢みつゝ、限りなく憧れて深き愁に心悵みぬ。彼の心は今やある家に辿りゆく。忘

れもせじ、窓に倚りかゝりて寂びしげなる乙女こそ、忘れもやらぬかの戀人のそれなりけれ、限りなく彼は太息しぬ。一度相別れてより求めても得ざりし戀人はそこにあり。彼は喜び狂して叫びたり。

『美しき顔、誠深き目さし、優しのはゝえみ。あゝ我は再び君を見出しぬ。いざ行かむ、君のもとに。君の腕にいざ我は伏せむ』
げにや海は失はれたるあらゆる昔と秘密とを證かすなりけり。

戀を去り、友を離れ、失望に泣き顔れたるハイチは今はさながら『破船者』のそれなりき。

『戀も望みも棄てはて、寂しく寒き渚の上、我は屍の如くに横はる。前には潮荒れて返り、後にはたゞ愁と惱みのみ。消えて流るゝ沖の雲こそ、あだなる我命にも似たりけれ。浪さはぎて囀啼く、忘れたりし夢の跡、消えにし人の面影、還らぬ昔の思出での今更に我が心に新しう添ふをいかにせよとや。』

『思ふ昔、北の地の際、我に戀しの人ありき。衣は雪よりも白く、髪鮮やかに波打ちて、夢の如くに肩にかゝりぬ。蒼白きその面に黒う輝く瞳こそ、旭にも似たりしか。』

『げに旭日にも似たらむ美しの君。君が光の前には我常に酔ひたり。柔き頬

清き唇更に月の光の如く甘き詞を聞きにし折はいかに我心の歡びつゝ、み空のはてに上りしよ。されどもそは昔なりけり。幸ちと望みと戀は已に去りぬ。思ひ、今更なにかあらむ。あゝ、我は今世を棄て船を棄て、人なき岸に横はるのみなるを』

げにや前には惱みの海原、後には愁へ悲み。いつかは春も老い易くして、昨日の夢も已に我がものにあらし、望みと戀と人の世は、たゞかの雲と水泡のそれにいづれぞや。海はそを致へぬ。海はげにも一切人生の憂苦の實在を語る詩歌なり。

嘗て彼は荒れ噪ぐ夜の海のはとりに立てり。彼の胸は煩ひに充ち、彼の心は疑ひに充ちぬ。永はに變らぬ浪に呼びて彼は問ひたり。

『おゝ、浪よ人生の疑問を我に説けよ。こは誠に舊き謎なり、されども古より何人かよく、この悲しき問ひを解けるものぞ。おゝ、潮よ我に告げよ、人とは何ぞや、彼は何處より來り、はた何處にか往く。光輝くみ空の星に住む人や誰ぞ』
今も變らぬ太古の姿、げに潮はあらゆる疑問をも告ぐるなり。

ハイチは又戀の子なり。なつかしき人の打明かしを聞きにし時、彼はいかに驚き喜びけむ。かくて彼は海に向て獨り叫びぬ。

『我は山に上りて歡び歌ふ、我は又海に行きて夕日に泣く。光り輝く我心もさ

ながらかの夕日にも似たる哉。見よ、其心はやがて美しく雄々しく、戀の海にぞ沈み行く』

夕日の正に、紅に、空を染め、潮を染めて沈み行く其姿、も何ものを以て其美しさを較ぶべき。天に平和、地に休み、聲もなく惱みもなき六合のはて、唯見る、沈む夕日の紅の溢るゝ。光明普く亘る處、萬象融化、蕩合、たゞ寂靜夢幻のあとを示す。あゝ、日は心なり、海は戀なり。心と戀と相觸れて、こゝに初めて萬物靈化の理想を見む。されど又風吹きて浪荒るゝ磯の上、獨りさまよふ物思ひは、誠に哀深きものなりき。彼歌ひぬ。

『年古りにたる岩に上りて我獨り昔の夢を夢みて坐しぬ。鷗啼いて風吹き止まず。浪泡立ちてたゞ寄せて返る。』

『我嘗て多くの友を有し、多くの愛したる人を有したりき。されども今何處ぞや、風吹いて止まず、浪泡立ちてたゞ捲き返る』

歳月駐めがたくて、過ぎにし夢や、神もいかむともする能はず。戀しの人々、懐かしの人々、たゞ春の花の如く逝いて、會離さながら風のまゝなり。戀と希望と、思へば惜しき若さも夢も遂に再び得べからじな。愁は時となりて、人はたゞ老いて行くのみ。げにもさびしき運命哉。

姿變らぬ風の跡、雲の行末に、三十年の來し方を思へば、浮世の思あゝ今更に繁か
らずや。日月永はにかしこにあり、我永しへに此處にあり。荒れて亂るゝ潮を見
れば愁のみこそ現なりけれ。

かくてハイネは獨り嘆きぬ。物思はしき夕への磯、彼は海に向いて泣きぬ。

『金色の光を帯ひて海は夕日に輝きぬ。我友よ、さらばいざ死せる後我を沈め
よ浪の底に。我は常に海を愛したり。静かなる其潮に、心の涼しうなりしこ
と幾度ぞや』

ハイネは海を愛したり『永しへの海、救ひの海』海はげに彼を知り、彼の恨みを慰め
歌ひ、彼を救ひぬ。げにハイネは海なりき。かくて神代變らぬ潮の音はハイネの
歌によりて、人その何の心なるを知り得たり。かくて一切人生實在のなやみ、思ひ、
微笑み、疑ひ、惑ひ、憧がれば海と共に永遠に返りつゝ、ハイネによりて歌となりぬ。
潮流れむ限り、星輝かむ限り、涙湧かむ限り、夢あらむ限り、ハイネの歌は海と共に、永
遠の生命なり。

げにやハイネの詩歌は海なり。そはテライデンの浪美しき海なりけり、美と愛
との神の生れ出でし海なりけり、歌と樂とのこはに限りなき海なりけり。

六

悩み、煩ひ、迷ひ、嘆き、一切の思ひを統合し、超脱して、光明無量なる歡樂と生命を湛
へたる平和の海は、我實に詩聖ゲーテに見たり。死と苦しみと迷ひより彼を救ひ
て、愛と光と平和を以て悔と罪とを贖ひにしイヒゲニエの住家なりしタウリスを
廻れる海の、いかに静けく尊きかを見よ。

ゲーテ年三十を越て尙悩みたり。世に戦ひ世に苦しみて實在を悲みつゝ、彼は
故園の愁を棄て、風柔かに密柑黄ばみてチトロロンの花香ふ以太利の地に逃げ
ぬ。甘き平和の跡を願ひ、長きほゝえみの愛を慕うて彼は以太利の地を逍遙した
り。そこには若さ普く戀も艶ひき。かくて限りなき生命の藝術と美しき自然の
懐に入りて、彼は心の痛みを癒やしたりき。彼は癒えぬ。莊麗豊富圓滿の徳を示
して天地融合の大理想を示せるラフ・ヘルの美術と共に、光を載せて蒼う流るゝ
大洋の觀めは『快活に鮮かに美しく輝きて』いかに大なる安慰を彼に與へしよ。晨
に海邊に植物を探りて萬物一元の眞理を想ひ、夕に月清き渚に立ちつくして、甘き
静けさを味ひしこと幾何時ぞや。かくて彼舟に上りて、南シチリーエンの島に渡
る時、波静かなる海の上、澄み亘る月のかげ隈もなく、清光千里潮のはてに普きを見

ては彼は限りなく『平和と安慰』とを覺えたりき。かくて又『雲もなき碧のみ空に連りて風も絶えたる光明の下に、さながら湖の如く緩く流るゝ海』を見ては彼は限りなく『歡喜』したりき。而してこの平安と安慰と歡喜の海こそは、げに彼が『イヒゲニエ』に現はれたる海なりけれ。

アウリスに於ける犠牲よりデアナの神に救はれて、イヒゲニエは今北の胡國の海にあり。彼は命救はれぬ、されども故郷を棄て父母を別れ弟妹を離れて、獨り北海のほとりにあること已に二十年。『人の國は遂に故國にあらず』二十年の間、朝夕海を隔て、雲を隔て、たいなつかしき故國と人とを慕ふ彼の心のいかに哀れなるべき。二十年の思ひと悩みは今も變らで彼の吐息と共に寄するや浪の、今も變らず返るを見ずや。

胡國タウリスの王ターオスは彼を戀ひぬ。されどイヒゲニエは限りなき懷郷の思を述べて其願を拒みぬ。王は喜ばず、限りなく快からで、遂にこの地の昔ながらの神制によりて、今捕へたる二人の旅人を神殿に捧げむことを彼に命じぬ。イヒゲニエは悲しみにき。屠羊の如く導かるゝや、彼は二人の縛を解きぬ。二人の希臘人なるを見て、今更に故郷のなつかしく覺えて、なにとはなしに父母の事を尋ねつ。答はあはれなるものなりき。彼の父アガムノンがイヒゲニエを犠牲に

したる故を以て、母はいたく恨み、トロヤ凱旋の後、私かに計らひて父を殺したり。イヒゲニエの弟オレステス之を恨み憤りて、年丈けて後父の爲めに刃を以て母を仇しぬ。彼はげに誠の母を殺したり。かくて悔と悲みとに自らを責めて逃げ惑ひぬ。行く處、罪と悪魔と悔むとの苛責に遇うて、何處ともなく漂浪しぬ。今捕はれし旅人の一人こそオレステスなれ。彼は自らの悔と罪とを明かし、イヒゲニエの前に狂せる如くに泣き頼れて、自らの血を以て自らを潔めむことを乞ひて止まず。そはまことに弟なるよ。イヒゲニエはいかばかり驚きしよ。あはれ二十歳の清き祈りと真心をばみ空の神もみそなはしけん、み恵こそは空しからで、姉と弟と今廻り合ふ胡北のはて、自らの姉なるを打ち明けては、イヒゲニエは今更に思ひ迫りて神の御前に跪きては、喜び、愁へ、交々胸に溢れつゝ、愛と信と情を以て悲極みて息を絶へにし弟をばいたはりぬ。御空の神も受け給ひけん、かくて彼女が誠なる涙と愛は遂に悩みのオレステスを救ひたり。『喜び今は胸に溢れて、彼の心は見渡すはて尊く聖なる其海にも似たらすや』かくてオレステスは醒めたり。見よ、一切の無明の悩み、悔み、血と嘆きとは、この大なる慈愛の情に入りて淨化し去りては、『生活の歡樂、事業の志』に充ちくゝて、オレステスは復活したり、望みと力と強さと勇氣とは凡て皆若く返りつゝ、彼は遂にイヒゲニエを胡國の外に救はむとしたり。

王に事情を語りぬ。王も亦意解け感極まり、二人の歸國を許し、遙けき海路の幸あらむことを祈りたりき。かくてイヒゲニエとオレステスと友の三人は舟に上りぬ。見渡せば潮靜かに風順なり。白帆一片高く揚げて、今や別れの時となる。イヒゲニエは今更に別れ惜まれて、目に限りなく涙あり。第二の父と稱えつゝ、ターオスを呼びて感謝と慈愛と友誼の涙溢れて已まず。「幸きくあれよ」これ王の最後の語なりけり。潮穩にして風は順なり。愛にも似て「潔く聖なる海路」遠く白帆一片高く揚げて、二人はかくて愛に酔ひ望みに酔ひ、光りに酔ひ、歡びに酔ひ、力に酔ふて故家に走りぬ。

あゝ、洋々として光と共に今も神代のまゝなる静けき海よ。一切の悔、悲、善と悪と、血と涙と、一切の戀と喜び、一切の水と流れとを包含して、そこには西もなく、東もなく、善もなく、悪もあらで、たゞ美と愛と力と光との永久に輝くのみ。「一切の諸川大海に入りて其名色を失ふ」と云へる古の聖なる書に記されたるその大海の姿は、吾はゲーテのそれに於て之を見る。

七

海の底に永はに潜みたる人生の意味は正しく此の如きものなりき。天地創造

の神の教えて告げたりし永遠の語と思は、我世花散り神滅びて後、人の世に於てはたゞ潮と詩との中にて知るべきのみ。浪の花より生れたりし美の神の姿、潮に潜める渡津海の神の戈の力、渚の波の樂の音、波間にひゞく歌の聲、今はたゞ詩と共に新たなり。神の定めたる人生の何なりしかは、月の夜、旭の折潮に聞き海に訪ねて知らるべし。其海の惱みはこれ人生の原始的の惱み (Ur-Schmerz) なり。其海の實在は原始的實在 (Ur-Existenz) なり。其海の力は原始的威力 (Ur-Macht) なり。其静けさは原始的静寂 (Ur-Friede) なり。光明普遍して天地の融合を示せる海は實にこれ原始的慈愛 (Ur-Liebe) なり。かくて人生の聖なる活動と理想とは神代ながらの海に於てのみ見るを得るなり。

我れは海を愛す。見よ、潮の奔る大海は誠にこれ人生の活ける文藝ならずや。

(三十六年八月)

春 と 人 生

頃ハ二月十日餘のこさなれば、梅津の里の春風に、よその匂もなつかしく、大井川の月影も、霞にこめて朧なり。一方ならぬあはれさも、誰故とこそ思ひけり。(平家物語、横笛)
 ……試登高而望遠、痛切骨而傷心、春心蕩兮如波、春愁亂兮如雲、兼萬情之悲歎、並一感於芳節、若有二人兮湘水濱、隔雲霓而見無因、灑別淚於尺波、寄東流於情親。若使春光可攬而不滅兮、吾欲贈天涯之佳人。(李太白、愁陽春賦)

思へば淡き月影に世を憂き思ひを外にして、甘き涙を辿りにし夢もなかくはかなく覺めて、あゝ陽春の光と花とはあまりに早く暮れて逝くよ。花やそれども又來む春に咲きもせめ、獨り青春老い易くして流るゝ水の又歸るべきよしなきを如何にせばや。

花散りて若さは老いて、春も今や暮れなむとす。嗚呼暮れて行く春の夕日の薄しき光を仰ぎ見れば、去にし夢路の花の香のさても惜しう偲ばるゝ哉。さらば人よ共に來れ、流れの邊り花影にして、春の心と若き思ひを辿らなむ可ならずや。

二

寂靜と威大とに飾られし冬は、嘗て大涅槃の姿と稱へられにきされどもそは冷かなるを如何せむ。あはれ、草なく緑なく人目も枯れし冬の世こそ死の大なる墓場なれ。げにそは若き人々の住家にはあらざりけり。

然れども見よ、春は來ぬ、光と霞とは空に深山に流れつゝ、嵐は潜み雲は融けて闊路と雪は死の影と共に皆消えぬ。草は萌え花は滴れて、泉囁き流れは奔りて、森に雲井に懐しき鳥の歌の響くを聞けば、我世の何處も色と樂と美と力ならざるべき。試に高さに上りて春を觀よ、あゝ南洋を旋り來て光と雲と競ひ奔る春の潮の響を聞けば、これ誠に新しき天地の生命の福音ならざらむや。若き人の蘇み返るべき時遂に來る。

死と老いの姿なるべき冬は逝きぬ、そは誠に血もなく涙もなき灰白の老翁なる科學の如けむ、力と美との春は來りぬ、そは誠に情と生命と詩歌の神の如けむ。其甘き唇に觸れ、其温かき微笑の光に酔うて、世と人と少女とは、いかばかり新しき力と思ひとを得べき、さながら花の如く泉の如く、且つ微笑み、且つ歌ひ、且つ活きて、人は凡て望みと信と生命の人となる。フ、ウストの如何に尊く蘇み返りたるかを

見よ。

フ、ウストは誠に若き力の人なり、彼は疑ひの子なりき。學び識らむには彼はひまりに熱き血汐を湛えたりき。彼は知識を疑ひたり、吾等が心靈の永遠の憧憬と要求に對して、冷かにして酷なる知は畢竟何の關する所ぞや。是に於て彼の信仰は懷疑となり、存在と現世は無意義となる、彼は今や自らの心に限りなき苦痛と煩悶を覚え、自らはかなき塵の姿を思つては、愈々神の莊大を感じて、遠き彼岸の涅槃を慕うて已まず。あゝ、人生夢幻なり、思想なり、速に肉身の假宅を逃れ、生死の大海を渡りて、かの寂光の天地に神と共に融合して、新光明新生命を享くるに若かじや。かくて彼は自ら死を計りぬ。時や宛も聖者キリスト復活祭の日、明方の空、今し月落ちて曙紅遠く閃き初むるや、遠近の御寺、梵鐘響き渡りて、舊き夢路の終りを告げぬ。聞けよ樂の音と共に、天女の聲、讚美の歌。歌ふて曰く、基督は蘇み返りぬ、救ひの人又世に出づ、世の煩ひと死に惱むもろくの人々、かくて永しへの恵みを受けむと。復活なる哉、復活なる哉、フ、ウストは始て我に歸りて、驚嘆感激今更に禁ずる能はず。幼かりし彼は思へばいかに幸ありけむ、其折には信仰ありき、希望ありき。あゝ、信仰は人生安住の基、神祕と奇蹟こそ其子なれ。彼は感激したり、彼は信の人となりぬ、彼はまた活きぬ、あゝ、彼は春の日と共に復活したりき。

その日明け、彼は野に出でぬ、見渡せば今や春、天地共に蘇み返るを見ずや。老いたる冬の姿は最早や深山の奥に隠れて、泉の氷融け初めつ、野は凡て緑色、これや希望の心、更に麗かなる春の光の照らす所、花咲き鳥啼いて、凡てこれ力と活動の姿のみ、天も地も、今や皆歡喜の色、あゝ、人生永はに歡樂のみ。フ、ウストは復活したり、かくて彼は活ける春の人となりぬ、活動と力と奮闘の人となりぬ。春は誠に新しき命なり、春は誠に力なり。春は誠に望みなり。

是に於て乎、春は無限の力なり、萬有の際を越え、光を追ひ、光を辿りて、若き思ひはかくて唯憧るのみ。見よ霞の姿、同じ一つの紫に空を罩め、海を罩め、谷を罩めて、さながら萬有の精靈を融合す。かくて若き思ひは憧れの翅により、空想の翼を借りて、差別を一にし、時と處を一にして、天地精靈の氣と共に相化生す。フ、ウストは即ちその春の夕、沈み行く夕陽の莊美を歎美して曰く、見よ、緑の野邊に夕日、いかに美しく閃くよ。峰の頂、紅に輝きて、谷間の際、み空隈なく、たゞ金色の流れの光漂ふのみ。あゝ、永しへの夕日沈むよ、沈まむ間こそ無限の思ひ、久遠の夢路、さらばその永はの光に酔はしやな。翼もがな、翼もがな、夕日沈むよ、夢は覺むるよ、あゝ、悲し、思ひの翼我にあるも、身の翼いかにせばや。さらばさらば、身こそよし、此處に止まれ、思ひは永はに夕日を追はなむ。

まことや、翼もがな、然り、空想と憧れとは青春の二つの翼よ。是に於て乎、夢路を渡りて思ひは常に宇宙の大我に通じ、神と感じ心と感じ魂と結ぶ。戀即ち成る。あゝ春よ、これや誠に大なる戀なれ。

三

詩人歌うて曰はずや、春の天地は凡て愛に依つて活く、見よ、野山の際草の緑、花の露、凡て戀の跡、凡て戀の幸と。是に於てか、ジグムンドとジグリンデは世と物との隔を超えて、遂に相戀ひせざるべからざりき。

星と花なる若き二人は兄妹の間なりき、彼等二人は世界統一の英傑を生まむが爲めに、神の命によりて世に生れぬ。然れども神命は幸薄すかりき、父は犬族の爲めに殺されて、ジグリンデは幼くして其長に捕はれて遂に其妻たるを強ゐられぬ。長じて後、兄ジグムンドは出で、犬族と戦ひしが遂に負傷したり、そは春の月の夜なりき、彼は且つ疲れ且つ憊るたるまゝ、犬族の長の家とも知らず、森陰の寂しき家を尋ねて、哀れを乞ひたり。其處に獨りのみなる美しき少女こそジグリンデなれ。二人こそよしや知らざれ、そは已に神の命に給ひし妹背なるをや。相似通へる目の光唇のあたり、相見て相近いて、二人はいかばかり奇しき思に亂れけ

む。ジグリンデはやがて清冷の水を彼に捧げぬ、然れどもそは唯に力と壯快を與へたるのみならむや、見よ、若き人の目は見る／＼、力強う輝きそめて、更に憧れの尊き懐しさを覺ゆるなりき。ジグムンドは先づ叫びたり、少女は誰ぞ、あだし人にはあらずらんやと。是に於て乎、二人の魂は相融け合うて、胸の思ひは相通ひ、二づ心は相和しぬ、熱つき血汐の同じ思ひに相湧き返りて、二人は既に已に相戀ひしたり。怪しむ勿れ、彼の女ころはあだし人の妻なれ、そは世の肉の、假りものなるを、二人は誠に生れぬ前世の長さ／＼、神の契りなりし也、今は唯だ相互に別れし魂と結びしのみ。あゝ世を離れ、時を隔て、處を超えて、吾等はげにも戀により憧れによりて、常に大我に融け入る也。

そは美しき夜なりけり、世を離れたる森の奥、人静かなる庵の内、烟れる月を仰ぎ見て、かくて二人は相對しぬ、互に身の上を打明けて思ひと戀の相通ふ時、いかばかり我世の語の短かりしを恨みけむ。思ひあまりて二人は唯に相抱くのみ。

今し『戀と春』は歌はれぬ。見給へ、美しき春の眺め、戀の月かげに照されて春はさながら夢のまゝ。音もさやかに懐しげに、奇しき思ひを誘ひつゝ、木末にそよぐ風こそは、春の静けき歩みなれ。あゝ春の辿る處、其處に花咲き鳥は歌ふ。更に見よ、春は戀を誘ふを。かくて我等の胸に潜める戀は光辿りて微笑み初めぬ。あゝ春

と戀と、そはさながら兄と妹、そはさながら妹背の中、然りそは妹背なりき、ジグムンドこそは春、ジグムンドこそは戀よ。かくて二人は相結びぬ、世の隔て道の戒め、そは今や何かあらむ、戀の光の前には萬障と現世と悉く消えて失せて、たゞ心靈の相通ふのみ。二人は自らの心に於て唯互に同じ一つの心を覺えしのみ。二人はかくて一つになりぬ、春や誠に戀戀やまことに神の定めよ、あゝそは神命の啓示ならずや。

四

春は愛也。そは永劫との融合なり、そは常に憧れの思ひと相結ぶ、そは常に久遠を求むるの心なり。然れども我世にては、夕陽の美落ちて消ゆる速にして、開夜の來るあまりに早きを思ひ見れば、若き思ひの翼もなかくに脆い哉。詩國の光、寂光の影、たゞ星よりも遙かにして、人の歎きは三千年を隔て尙今も變らず。サッポ一海に沈みてより、理想は現實と相反し相乖いて、一つなるべき時はあらじ。思へば人の子は翼持たざりき。

短き命なる我世に於て、いかなれば人の子は無久を夢むべき戀を得し。理想と現實は遂に一なるべき期なきものを、人の子の思ひはなかなかに禍なる哉、見よ、思

ひは永しへに悵むを、かくて戀は惱みなり、悔れは愁ひなり、嗚呼春や愁なりけり。ジグムンドとジグムンドも亦永しへの惱みの子となりぬ。神の定めなりし戀こそは、遂にはかなき身の禍となりてけれ。二人は相携へて犬族の家を逃れしが、嫉みの神の呪ふ所となりて責罰受くる身となりつゝ、ジグムンドは遂に犬族の王の爲めに斃されぬ。ジグムンドも亦ジグムンドを一夜の契の形見として、はかなく消えぬ。かくて二人の戀は哀れなる戀の終りを告げしなり。戀永しへに悵まざるべけむや。

ウルテルも亦此の如き春の愁に惱みたる一人なりき。彼は戀の子なり、憧れの子なり、久遠のあなたに命を求むる子なりけり。そは五月の空なりき、嘗て彼は流れ清けき小川の邊の若草に坐して、はてなき春のあなたに夢み入りぬ。空の霞に思ひ潜み、烟る谷間に憧れて、日麗かに彩る森の姿を眺むる時、彼は唯に全能の神の現在を感じ、萬有の愛の神の逍遙を感じては、たゞに久遠の戀を思ふのみ、かくて彼は天のあなた地のあなた、唯實在と共になりて、さながら戀人と相携へし心地したりき。あゝ彼は久遠の戀を願ふ子なりけり。

然れども世は理想のものにあらざりき。彼には戀すべき時ありき、されども戀すべき人はあらざりき、彼には戀すべき人ありき、されども戀すべき道はあらざり

き。彼は今やロッテを見たり、久遠の戀を身に體したるものは彼女なりき、彼は戀人よ、されども悲め、時や已に遅し、彼や人の妻、あゝ戀すべき道だにあらす。今ぞ思へ、久遠を慕ふウエルナルの戀こそは遂に其身の仇となりしを。戀すべき道だにあらす、救ふべき道だにあらす、逃るべき道だにあらす、あゝさらば活くるべき道だにあらじ。かくて彼は泣きぬ。

彼の思ひは燃えてなりぬ、たゞ自らの心を害ふのみ。曙の春の雲も今は跡なく消ゆるを見よ。天も地も春もかくて彼にありては惱ましきものとなりぬ、春も暮れて花も逝いて霞も消えし跡見れば夢にも似たる現かな。かの萬有と共に愛の中に融けなむと願ひにし我思ひの、今はたゞ流るゝ水と共に逝いて行衛は更に知るべからず。消えて流るゝ雲の跡はいづれ來し方、されども我が願ひしもの皆凡て、あゝ何處にか求むべけむ。かくて彼は泣きぬ、惱みの終りは唯墓場ならむのみ。彼はロッテを離れたり、そは永しへの別なりき。然れども世は彼の天才と憂愁を容るゝにはあまりに狭かりき。あゝ煩鎖と形式と階級と學究とは戀の死よりも寧ろ苦しとする所、彼豈世に堪ゆべけむや。是に於て彼は再びロッテに歸り行きぬ、そは五月の初めなりき、一歳の思ひを夢にして彼はやがて故郷に入りぬ。春今や閑也、郷を出で、より已に十年、望みと力とに充ち充ちて若かりし昔のウエル

ナルは如何に健げなりし兒なりしよ。今や戀路に露濡れてかいななき夢のうたかたを命と受けし片袖に、包むに堪えぬ思ひの身、戀故罪ある越し方を思へば、あまり悲しき我身かな。嘗ては知らぬ浮世の知らぬ幸をば憧れたりし事ありき、されどもそは凡て幻なりき。希望と志は悉く誤りて、命とも願ひし其戀も今は我身の罪と思へば、死と墓場より外はあらじ。かくて彼は哭したり、かくて彼は死せむが爲めに唯だ急ぎ行きぬ。

その年の暮なりき、彼の願ひは果されたり、彼はロッテを見たり、かくて彼は死しぬ。あゝはかなきウエルナルよ、いかなればかく迄に寂びしき死に終らざるべからざりし。春は永しへの惱みなりけり、戀は永しへの煩ひなりけり。

五

此の如きは獨りウエルナルのみにてはあらざりけり。若き春の詩人ヘルチーも亦春の愁の爲めに終りたりき。

彼や生れて蒲柳の質、幼くして母を失うてより、悲哀憂愁の兒となりて、たゞ物さびしき森のかけ、墓場のあたり佇みつゝ、哀れなる寂びしき物思ひを友とするのみ。十八歳の折なりき、そは春の夕、烟るみ空に鶯啼いて霞も艶に林檎樹の色薫ばしき

花影に彼は美しき乙女を見たり。しとやかなる姿、真白なる衣更に静けき目、さえたる金色の髪、あゝ無邪氣なるその微笑、彼は今や初めて夢に見し天女を見たり。思ひはあやしうも亂れつゝ、彼はかくて初戀の人となりぬ。永しへの光ともなりしラウラとは即ちこの乙女なりき。彼は戀じたりき、されども世は眞のみにてはあらざりけり。乙女は彼のものにはあらざりき。かくて彼は限りなき惱みの人となりぬ、この惱みこそは永しへに癒もせぬ心の痛みなりけれ。

春の夜なりき彼は月に向ひて泣きぬ、おゝ月影よ、この野邊を照らせ、此處こそは去にし思ひと夢の姿の、永しへに逍遙ふ地よ、さらば月影清う照らせ、嘗て我乙女の坐せし跡を我は求めむ。我は泣かむ。おゝ友よ、月よ、さらば啣て、諸共に薄すき命を泣かばやな。

彼は又月に向ひて泣きぬ、我や獨りの身、汝こそ照らせ、我月よ。君は去りにき、太息と思出の涙とを以てしても、今は如何ともすべからず。さらばよ、我は死をぞ願ふ。よしさらば他日、かの君が我墓場にも訪ね來なば、隈もなく墓上の花を照せ月よ。さらば君は花懸りたる墓に撞れて獨り泣かなむ。

彼の願ひは神も遂に許し給ひき、二十八歳を露の命にして、はかなくも彼は逝きぬ。春の思と春の戀に惱みにし彼の心はかくて永しへに癒ゆる機もなく、獨り

さびしく逝きにけり。然れどもこれや、若き思ひの運命なるをいかにせむ。

狂して終りし詩人レナウも亦此の如く春の愁に堪え兼ねし一人なり。彼は戀愛悲痛の人なりき。彼は多く戀に悩みたり、幼くして彼はソヒーを見たる事ありき、されども彼の戀ははかなきものなりき。越えて又ベルタを見たり、そも亦哀れなるものなりき、されどもこの戀の悩みこそは殊に痛ましきものなりし。世界苦痛に悩み、人生の無常を哭して『死の祝福』を歌ひしは此の時なりき。越えて又彼はロツテは見たり、あゝロツテよ、理想の女性、愛すべき目と眉とはいかにみ空の微笑みと思ひを語るべき。彼は戀しぬ、されども彼の心のあまりに深く刻まれしを如何せむ。『夢は再び夢むべからず』青春今は老い去つて若き涙はまた歸らず。あゝ戀すべき人はありき、されどもそは戀すべき時には非ざりき。春の日なりき、嘗て彼は哭して曰く、春の風よ、何故にしかく悲しげに囁くよ、森のあなた、梢を渡るはたゞ哀悼の響。あはれこは尊き春の死する時なるを、空は黒うなりぬ、雲過ぎて電の光嵐の亂れ、野に森に亂れて騒ぐ。今し春は逝くよ、春は死するよ、見よ、咲き残る薔薇の花こそは春の傷より流れて出でし血汐なれ。

失戀斷腸の悲哀に悩みて逝きしものは獨り春のみにてはあらざりき。レナウも此の如くにして逝きしなり。憂鬱と世界苦痛の煩悶に堪え兼ねて遂に狂した

りし彼は、生きながら尤も悲惨なりし春の愁の爲めに死せるなりき。

ハイチの如きは尤も春に愁へ春に嘆き春に泣きたる一人なり、幼くして彼は戀人に別れたり、これより彼は永しへに傷心優々の人となりて涙と愁へはその友となりぬ。後に彼は北海の邊に漂浪し、將た又ロンドンに遊びしも、社會の道德と宗教と及び慣習形式は彼の思想と身體を驅りて愈々刺戟的にいよ／＼悲劇的ならしめたり。さながら光を嘲らむ魔神の如く、花影を驚かす鳥の如く、人と世と眞理と道德に對して今は彼は痛罵嘲笑を恣まゝにしつゝ、かくて一世を風靡したり。此の如くして彼は自然に隠れたり、更に春の思ひに隠れたり、あゝ春こそは誠の友見よ、彼の唯一の命なりし戀も亦春の心なるをや。かくて彼は花に隠れ、月夜に潜みて、小鳥と共に望と共に、たゞ惱みの戀を啣ちたりき。見よ、春も亦惱むをや。是に於て彼は即ち春なり、望も小川も星の光も、然も彼にありては直に春の詞なり、微笑の言葉なり、嘆きの言葉なり、そは春の太息なり、春の接吻なり、彼は唯春に於て自ら森陰に佇みぬ、そは已に春なり。然は歌へり、されどもそは嗚咽なりき、其歌は即ち戀歌なりき。彼嘗て花を求めたりき、花には凡て心ありき、そは彼の心の如く、美しく又哀れなるものなりき。かくて今に於て彼は知りぬ、花も、然も亦彼と同じく

哀れにも又惱みあるものなるを。

そは月の夜なりし、彼は池畔に佇みぬ、かくて彼は細き眠蓮の花の、夢みつゝ、愁へながら水面に頭擡ぐるを見たり。やがて月かげは戀の惱みを以て靜に花を照らすと見る間に、眠蓮は驚いて恥らいながら水に隠れぬ。あゝ月と花と、惱める光竊める戀、ハイチはかくて自らの心の痛みを覺えたりき。

是に於て春にも亦夢ありき、彼の如くそは悲しきものなりき、かくて花は亦煩の爲めに亂れつゝ、然の歌も亦竊かなる惱みに戦くなり。物は皆戀に酔ひ、物は皆酔うて愁へ、物皆愁へて泣く、彼も亦遂に亂れざるを得むや。是に於て彼の心はさながら波立つ海の面なりき。月こそ永しへに一つなれ、波間の月のいかに碎くる。胸に秘めしかの君の面影も永しへに一つなれども、胸の思に映るべき其姿のいかになやましようも亂るべき。かくてハイチは戀の愁に堪え兼ねて獨り泣きぬ。

彼の悲しみはこれのみにてはあらざりけり。彼の戀と若さの已に／＼去にしを見ずや。今は唯、思ひと涙と太息とのみは灰の如くに冷かに残るなり。

春は復同じ一つの花載せて今年も歸り來ぬ、若き人の思出の夢も亦歸る。されどもそはたゞに薄すれ行くのみ。知らずや、我世に於ては花も戀も遂に朽ちずば已まし。彼はまた嘗て泣きぬ、尊き望みも、如何ばかり花の如くに咲きては凋むべ

さかかて空しく墓に歸るのみと。

彼は又散り逝く花の陰に立ちつくして暮れ行く春の空を仰いで嗟嘆したり、いたまじき空かな、亂れの雲は白髪にも似て、そはさながら冷酷の魔王に似たり、いたましい哉、空の一度睨む所、花と香と、愛と歌とは何處も枯れ果てざる所あらず。あゝ我世の人の思ひは春と共に永しへに惱まざるべからざる也。

ハイチの愁は實に此の如くなりき、彼は亦世界苦痛の兒なりし也。彼は夢と現と、理想と現實と、知と情と、思ひと行ひと、人と自然との背馳を見て、自ら人生の苦悶と慘禍を擔うてさながらアトラスの如く堪えて忍びぬ。彼が春の歌こそげにも世と人と天地との永しへの煩ひなる『世界悲劇』の一大抒情詩とも云ふべけれ。あはれ其ひびきの如何ばかり悲しきかよ。

六

春に現はれたる人生は此の如きものなりき。そは力なり、かくてそは慥れなり、かくてそは限りなき戀なり、そは無限の融合を欲す、故にそは大なる惱みなり、故にそは又大なる悲劇なり。これが爲めに或ものは春の思ひの爲めに現實に惱みて其生命をも捧げたりき。

春は誠に大なる悲しみなり、散り行く花の一つ、融けて消ゆる夕暮の雲、永はに流るゝ谷川の水、梢渡る夜半の戦ぎ、闇に消ゆる星の流れいづれか大なるしかも聲の無き悲しみにあらざるべき。試みに高きに上りて暮れ行く春の薄すき夕日に照らされて、歸らぬ夢路を付り見よ、聲もなき夕空の思ひに、若き人の心のいかに戦くべき、頬を流るゝ涙の雫は底も知れぬ胸の奥にこそたゞ響け。

あゝ春は戀されどもそは『甘き歎きの戀』なり、苦がき喜びの戀なり、春は力なり、それこそは自らを鞭つべき苛責なり、春は調和なり、夢路なり、されどもそは大なる悲劇の面影なり。げにや言葉にも上り難き幾その惱みは、あゝ如何ばかり太息と共に散る花と共に葬らるべき。まことや、世に尤も大なる別れの悲しさは暮れて行く春にこそ偲ばるれ。

さらば人よ、春は暮れむとす、我世の戀と微笑は永しへに別れざるべからず。かくて人の世には永しへの苦痛あり、これこそは生れたる人の免るまじき罪なるを。戀に憧るゝものよ、さらば來れ、戀を失ひし者よ、さらば來れ、戀に微笑むものよ、さらば來れ、過ふは暫し、別れは永し。さらば暮れ行く春の夕を花影の夢路に立ち盡して、薄すき運命を泣かばやな。

(三十七年四月)

夕陽の美

“In eurem Serben soll noch euer Geist und eure Tugend glühn,
gleich einem Abendroth am die Erde.”
——Nietzsche-Zurathustra.

嗚呼夕陽は下る、何ぞ美しき。

見渡せば天地静寂風は潜み雲は夢みて海や萬里波上らず。聲なく色もなく静寂の間を今や夕陽静かに下る、さながら戀に潜み行く心の如く、其姿や莊大にして其光や燦爛たり。あゝ彼行く處る凡て輝き彼照す所凡て燃ゆ。何ぞ麗しき。

忽ちにして紫紅の光天地に溢れて空を染め海を染め宇宙を彩る。雲悉く光り艶ひて天はさながらアフロデーテが蓄蔵の花園に似たり。潮も亦紅を流して浪悉く珊瑚の色、底の海の國夜は明けてネライゼンの女神や躍り出でなむ。而して浪擧らず風日覺めず、萬有凡て静寂の中に黙して、寂滅の光明を驚嘆し其別離を悲哀す。天地今や無聲無象の樂聲の中に潜む。

かくて夕陽は静かに落つ、歩みは安慰、光は平和。あゝ天上の光の神、威力の神、宇

宙に於ける最高の超星 (Überstern) 爾太陽今潜むか。我を輝らし我を活かし我を呼びし爾生命の光、今沈むか。さらば人よ仰ぎ見よ、知らずや、偉大なるものは沈む時に於て尤も莊麗を極むるを。

二

神始めて天地を創る、地は形なく曠漠として暗黒たゞ、其の面を蔽ふのみ。天地唯混沌たり、あゝ怖ろしき深さなる暗黒の海、長さ無く高さ無く時も無く處もなき永久の混沌の闇路、天地正に此の如くなりき。是に於て大神光あれと宜ひ給ふ、光即ち成る、光成りて日即ち現はる。誠にこれ神の意志也、神の威力そのもの、發現也。否、神そのもの、體現にして、これ「最も輝ける慧光」なり。是に於て神はこの日輪に命じて宇宙整和の大命を成さしめぬ。

日神即ち命を受け駒馬を驅り「時」の女神を従えて混沌の太空に向ふ。妹なるオローラの神先づ彼に先立ちて驅く。燭光を手にしたる明星を導きつゝ、携へたる薇薔の花環の花びらを撒きながら、やがて曉の女神は天の戸開いて驅けり行く。花散るあたり、到る處曙光漲ぎり朝紅流る、天地初めて覺醒す。是に於て日神徐るに現はれて光明を四天に射て魔神を拆伏し、混沌を服し暗黒を制す。かくて晝と

夜は別れ、時と處は定まり、蒼穹と大海は定まりて常寂の光明、靈妙の真理即ち成る、世初めて生命あり。

是に於て日の神は新たに宇宙を正し恒道を描きて自ら八大の星辰を創る、曰く水星(Mercury)曰く金星(Venus)曰く地球曰く火星(Mars)曰く木星(Jupiter)曰く土星(Saturn)曰く天王星(Uranus)曰く海王星(Neptune)。而して更に創られたるは誰ぞや、彗星是也、これや誠に天界の神祕の兒。

嗚呼日の大神、此の如くにして宇宙を支配し混沌を主宰す、これ實に天地の主星(Herrenstern)なり。

然れども其面に一大の黒點の横はるを見よ、これ憂鬱の影悲惨の色のみ。偉大なるものは常に煩ひ惱むものなればなり。而して赫灼たる光明の永しへに胸に燃ゆるは、自らの威と力と智を擔へる自らの苦しさに外ならぬやは。

嗚呼日の神は已に煩ひ又惱む悲惨の子、苦悶の子。是に於て彼は又現在を超えて永遠の他界を慕ふ、是に於て彼は即ち飄浪の子となる。知らずや太陽は星辰の群を率ひながら一秒時間二十哩の速力を以てヘラキュール星座に向つて飛翔するに非ずや、而して彼自ら何の故なるを知らざる也。然れども偉大なる者の存在は憧憬と煩悶と飄遊に外ならざる也。

嗚呼天界の超星、煩悶の兒、飄遊の子は名殘の光明を世に抛げて今や遠く沈みつつあり。仰ぎ見よ、偉大なるもの、隠るゝは世に尤も美しきものなるを。

三

嗚呼天上の主宰の星帝や大なる哉、其徳や美なり、其威や莊なり。我は更に又彼を周る星辰の群を讚美す、偉大なるものに仕ふるものも亦共に偉大なればなり。

マーキュリー(水星)よ、我爾を讚美す。迅速にして飛行風の如くに快活歡喜の青春の神、我爾を讚美す。幼くして彼は樂を成せり、幼くして密かに野に下り智の神アポロンの牧牛を竊みて彼を驚嘆せしめ、遂にツォイスの審判により神と同じく天上に昇りて不死なるを得たり、これより彼はアポロンと共に智と光の友となる。あゝ爾マーキュリー、文藝を守り哲學を護りて文化を司り智慧と歌樂を世に教えたる爾マーキュリー、友情と青春の美と威嚴と快活の理想となりて嘗て希臘の文明を照らしたる爾マーキュリーの神、我は讚美す。

ヴェーナス(金星)の神よ、希臘の昔に愛の神、春の神、美の神として現はれ、今や明け暮れの明星となりて我黙思の友となれる爾美の女神よ、我は讚美す。東海の波の泡より現はれつゝ、眞珠の祕密を世に傳へて初めて生命の美しく戀のゆかしさを人

に教えたるものは彼なりき。是に於て薔薇は花咲き翁草は開きて野も山もいづれゆかしき戀の花、これより我世に涙もありき、惱みもありき、別れもありき、然れどもうは新しき生命なりし也。今もあけくれ明星の影に見はてぬ夢のはかなの思ひに、語らぬ惱みを嘆くもの、そも幾何ぞ。あけがたの野の花のいかに露けきを見ずや。然れども我は尙そを人生の至幸と呼ぶ。

あゝ爾ヴェーナス、夕の星、美しの星、我は讚美す。爾嘗て我世の偉大なる者を譽め稱えんが爲めに尙日中に出で、光眩き日輪の傍に侍して其光明を飾りたる事ありき。古は美と信との勇士エテアスがトロヤを出で、西方に渡りたる時に現はれき、今は即ち大帝ナポレオン、凱旋の軍を率ゐてあらゆる人生の威權と光榮を身に飾りながら、パリに入れる時に現はれたり、莊なる哉。ヴェーナスは常に偉大なる者の讚美者なり。然り、美と愛は唯に偉大なる者を飾るべきものなればなり。あゝ女性の中の極致、愛と生命の理想なる爾ヴェーナスよ、我は讚美す。

爾地球、我は讚美す、是れ我家。この地今老いて光あらず、世に群蠅多くして小なる者怯なる者常に充つ、清きもの尊き者の住家にはあらざる也。然れどもツォイスとアポロンとヴェーナスを創りたる希臘人の故家なるが故に、プラトーン、ジョーベン、ハウエル、ニーチェ、ゲーテの故家なるが故に、アレキサンデル大王、ナポレオン大

帝の光榮を以て嘗ては飾られしことあるを以て我は地球を愛す。天才の威嚴は光明となりて燦然として今も尙この世の心靈を照らす。あゝキリストと佛陀を葬りたる地球、我爾を讚美す。

マースの神(火星)よ、紅に輝く星よ、あゝ戦争と勇敢と冒険と無畏なる青春なる神、我爾を讚美す。古は神光あれと宣給へば即ち光ありき、闇と悪魔は去れと宣給へば即ち彼等皆去りき。今は世老いて此の如くならざる也。是に於て『秦平を出さむが爲に非ず、刃を出ださむが爲め』の福音即ち起る。曰く拆伏、これ實に一切の闇黒に對する尤も簡明なる宣言なり。超人即ち教えて曰く『戦争は心靈を光明に導くべき尤も近き道なり』と。而して戦争の理想は何ぞ、そは意力の無限なる發展也、『威力の無限なる欲望』の福音即ち起る。今や世は平和を稱ふ、然れども愚昧なる凡俗の安逸何かあらむや、戦争の教え遂に起らざるべからざる也。嗚呼再創の先驅にして男性美の理想の神、マースよ、我は爾を讚美す。然れども彼は愛と美の神と相携へしを忘るゝ勿れ、キュビッドとハルモニヤの父なるを忘るゝ勿れ、戦争は調和にして美にして又愛なれば也。

セレス(Ceres)小惑星よ、『地の母』なる爾セレスの神、かの美しきヘルセフォネの母なる春と花と繁榮の女神、我は讚美す。彼れ世に現はるゝ時我世は如何に花咲くよ、

秋の日には如何に麗しく林檎實のり葡萄紫に熟するよ。彼れヘルセフイーチの地獄に下れるを悲しみつゝ涙の谷間に隠れながら哭したる時世はいかに惨憺として暗雲氷り聲色枯れしよ、人は此の如くにして初めて死の哀れさを見たり。而して今やセレス天に昇りてジュピターの前に従ひつゝ自ら永遠の花となりて宇宙の光明を飾る、四百餘の小遊星の如何に美しきかを見ずや。あゝセレス、我は爾を稱ふ。ジュピター(木星)よ、嘗てオリンブの山にありて世を支配したる全能の神、今や天上にあるや、一切の神と人とを主宰し電光を携へて宇宙を瞰視す、神々しき御姿、人生の尊嚴と威大を絶し高潔と至醇を絶したる様、人の世の言葉以ていかで之を稱え得べき。其一度立つや、天地震動して電火閃き嵐湧き雲湧いて風雨漲る、意のままのみ。如何なるものも彼を止むる能はず、誠や「力に於て威に於てあらゆる神あらゆる人に勝つ」。而して彼は正義の神なり、一切の邪惡と闇黒と惡魔とは彼の常に挫く所なり。彼を欺きたる人の子プロメトイも長き悶思の後其罪を悔みぬ、彼はソオイスが永遠の正義天道の神なる事を知りたれば也。あゝ主宰の神、彼の頭より生れたる慧光と藝術の理想美の女神ミテルヴの如何に尊き。又雙兒なる光と青春の神のアポロ及び月光の女性美の神デアナの如何に美しき。彼は誠

に美と若さと智慧と文化の父也。あゝ全能の神ジュピター、我は爾を讚美す。

サターン(土星)の神、金環を帯べる燦爛の星、我又爾を稱ふ。彼はジュピターの父、彼は力弱かりき、ジュピターによりて斥けられて遠く西の國に奔り、茲に自由と平和と農産の道を其民に教ゆ。彼は敗亡の神、彼の下に生れたる人は陰鬱にして性は因循なり、よし信實なりと雖も苛酷なり、非寛容也、而して彼の生涯は敗亡と苦悶に終る。あゝ痛むべきサターン、されど我は爾を稱ふ、苦悶と苛酷と敗亡は又常に偉大なるものを飾れば也。

ウラヌスの神(天王星)、我又爾を稱ふ、彼はジュピターの祖、地の神より生る、光明の天の神也。尤も力有りしが彼も亦敗亡の神なり、其子サターンに依りて王位を斥けらる。其色や青う光りて、さながら敗亡の弱さを懺悔するが如し。

ネプトーンの神(海王星)、最後の星、海洋の主宰の神、我れは爾を讚美す。オリンブスの昔、ジュピターとの威嚴と相並びたる海洋の威嚴のいかに莊麗を極めしよ。その三又戟を振う時、いかに世は震ひしよ。嵐起り潮渦いて暗澹冥晦、天地山川震駭す。トロヤの城もかくて紛垂せられ、ヘリケの市も亦かくて海に沈みぬ、彼等は凡て彼の意に逆らいたれば也。あゝ「世を震はす者」よ、何ぞ偉大なるよ。偽善と虚榮と邪惡と凡俗とは彼の前にありては何等の力あらざる也。あゝ君見ずや、詩人ハ

イロンは正に彼の意志を継紹したるものなるを。彼の詩歌は即ち十九世紀の虚飾と借文明に對する神命の三叉戟なりし也。あゝ美しき海洋の王星ネプトゥーン、我は爾を讚美す。

更に我は彗星を讚美す、孤獨にして悲惨と憂鬱を世に教え渺茫のあなたに世を離れ光を避け愛を避けて、唯だ自らの默思の道を迷ふ天界のロマンチケルは正に彼れ。突如として現はれてあらゆる神祕と疑問との光を世に抛げて後、突如として消ゆ、尤も靈妙なる天才は正に彼れ。人は彼の行末を知らざる也、越し方を知らざる也。然り、人の思ひ及ぶ哲理と科學と道德の版圖は彼の天地にあらざる也。神さへも光さへも尙及ばざる廣大無久の天地は將に彼の逍遙ふべき世界なり。詩人カーライルは正しく彼の兒也、畫家ベックリンは正しく彼の兒なり、哲人ニイチェも亦彼の兒也、見よ、一度去つて彼等は復た現はるゝ事なき也。あゝ爾彗星、我は尤も爾を讚美す、獨りなる者、疑問を興ふる者、神祕なる者、迷ふ者、離るゝ者は世に尤も偉大なる者なれば也。あゝ一度生を宇宙に享く、願くは彗星となり永しへの暗黒の空に迷ひ行きて、此の如き世に再び還ることなからむ。

あゝ日の神、彼は實に此の如き偉大なる者の凡ての帝王也。美と智の父、威と光との父、神祕の父、萬有の基なる爾日の神、今沈むか。紅の光は今紫紺となる、海や

空や山河や、凡てこれ咏嘆の姿。これや涅槃の色。あゝ日の神沈むかさらば。知らずや、偉大なる者は沈む時に於て尤も莊麗を極むるを。

四

然り、終る時に偉大なる者は尤も美なり、ナポレオン、ゲーテ、及びニイチェの終りは如何に麗しかりし。あゝ彼等は凡て暗黒凡庸の下界に現はれたる日人(Sonnemensch)に外ならず。

あゝナポレオン大帝よ、歴史は彼あるが爲めに始めて光ありき、人生は彼あるが爲めに始めて價值ありき。かくて彼は大なる歴史と個人の最高の威大を創りたりき。然り彼は最初の者にして又最後の者なりしなり。

彼は飄浪の子、大なるロマンチケル也、彼れは憧れたり、昔時アレキサンデル大王がホメールの勇士アヒロイスの跡を慕ひつゝ、世界統一の夢を追ふて世界の際をさ迷ひたるが如く、大帝も亦恒久の理想を夢みて世界のあなたに憧れぬ。彼は誠に大なる理想の子なり、彼は唯この理想を世に築かむとしたりき。かくて彼は詩歌の代りに冥想の代りに戈を執りぬ。彼が生涯の事業は誠にこの戟を以て描かれたる一大悲劇詩なりき。然り彼は常に悲劇を愛讀したり、嘗て自ら戯曲を筆に

せむと思ひたり、然れども舍いて可なり、彼れ自ら絶世の悲劇の主人公なりしをや。かくて彼は軍を率ひて埃及に向ふ、兵をピラミッドの下に集めて叫んで曰く「六千の歲月は此の偉大なる建物の尖頭より汝等を瞰下す」と。あゝ彼は尙現代を離れて遠く古代の靈界に呼吸せり。彼は更に陣中ウエルテルを携えて讀む事七度、夜三更孤燈私かに卷を蔽うて哀れなるウエルテルが運命に紅涙を灑ぎしこと幾度ぞや。彼も亦現世の悲惨なる運命を悟りて、煩鎖なる社會の方則に煩ひき、思ふ、解脱の道は二つのみ、自ら早く死すべきか、將た世を滅して新たなる世界を創るべきか。かくてナポレオンも亦年少にしてウエルテルの如くに早き死に憧れぬ、然れども彼は意志の人也、かくてビストルの代りに彼は戟を手にしたり。ネプトゥーンの如くに世と人とを震碎しつゝ、かくて新たに創れる彼の世界の如何に美しき。

彼は誠に飄浪の子なりき、忽ちにして酷熱焼くが如きエデフトに入り、忽ちにしてアルプス山の冬に蹲ちて大雪の中に行衛を割す。忽ちにしてスベインに入り、パリに歸りて一切の光榮に酔ひては忽ちにしてモスクワに赴ひて氷寒と敗亡と失望と憂憤に悩みつゝ、辛うじて身を以て逃げ還る。是に於て一天萬乘の王冠と一切の光榮を棄て、波路遙かの島守となり、朝な夕な唯千鳥の聲に夢の現に憧るのみ。かくて彼は讀書の人となりて古人の詩歌に思ひ辿る。あゝ一切の榮譽

を棄て、今や彼は初めて詩歌にのみ見るべき「まことの人生」に歸る、而して彼れ自らの生活こそ「莊嚴にして雄大なる悲劇」なれ。此の如くにして彼は逝く世の運命の何たるを觀じて「最上の智慧」なる神の力を身に悟りつゝ、靜かにも眠る彼の姿のいかに美しき。見よ、うらゝかに麗しき死の顔には今や悔むと煩ひと「カイゼルの者」の影を止めず、靜寂と慧光のみは唯彼の終りを閉ざす。嗚呼何ぞ美しき別れるよ、彼は偉大なれば也。

詩人ゲーテ、彼は詩歌の帝王なり、ナポレオン大帝と同じく彼も亦新たななる世界と美しき個人の威權とを高めたり。彼も漂浪の子、戀に煩ひ死に憧れ、無限を思ひ恒久を慕ふ。墓なの戀に悩みたる彼の「ウエルテル」は自殺したり、されどもツォイスの威徳をまのあたり嘆美したる彼の「プロメトイイス」は活きたりき。更に彼は希臘の昔に歸り行き「オレステス」となりて悔む悩みつゝ、更に以太利の野に下りラフェルのマドンナの前に光明の「イヒゲニエ」を仰ぎて新しき命に蘇み返り、更にアルプスの頂に上り旭光の莊美を望み宇宙の幽麗なる聖靈に感じて嘆じて曰く「人生は映ある光明に榮ふ」と。かくて彼は日輪となり、活動勇敢の人となり、事業の人となり、力と光とを四方に抛げて渾沌を制し暴濤を御し闇黒を拆伏す。事業はなりぬ、彼の「第七日」は今來る、即ちイルメナツの峰に上る。彼昔時若うして此處に上れる時

ありき暮雲静かに下るの夕、彼は小詩を傍の堂の戸に書き付けたりき、詩は今尙存す、曰く「静寂は已に四山の頂に下る、森の梢は風も渡らで鳥また黙す、さらば慰はむ我も亦」。思へばそは已に五十年の昔、時も老い若さも老い、戀人は去つて彼の友また世にあらず、彼獨り止まるのみ。あゝ山河舊によつて新しきに人生何ぞ茫々たる。惘然として彼は泣きぬ、嘆じて曰く「さらば慰はむ我も亦」と。「さらば慰はむ我も亦」。あゝ彼の終りとはなりぬ、静寂の影四方に下りて平和の暮は野に下る、風も眠り雲は還りて鳥は黙す、かくて彼は逝きぬ。「誓むるものは救はれなむ」。かくてゲーテ、フュストは神の御使ひに救はれて光明燦爛の天國に入り、「久遠の女性」に依りて永しへの生命を得つ。美しき終り哉、彼は大なれば也。

詩人ニイチエ、彼も亦さながら電光を抛げたるツォイス也、彼は明かにアポロン、デオニッスと共にオリンピックを逍遙したる希臘神話の人なりき。彗星となりて永しへの日神を周ぐる時、過つて此世に現はる。是に於て人愕いて彼を狂と呼ぶ。彼はまことに希臘の子、彼の故國は橄欖薫りて風も艶ふ南の際、波清く潮鮮かなる南海の國、過つて朔風吹荒びて寥寂と闇黒渦く胡に落つ。見渡せ地は世に力無く光無く、群蠅野に滿ちて卑怯の者、小なる者、呻く者のみ活く。彼等の道徳は奴隸の教えのみ、彼等の宗教は、服従と犠牲を教えて常に個性と自我の斷滅を強ゆ、これ自

殺の教義、闇黒の文化に非ずして何ぞや。是に於て彼は先づ戈を振り電を抛ち、一切の世界と凡俗の教義を破砕して新しき世界を創る。宣して曰く「神は已に死したり、超人獨り生く」と。超人とは何ぞや、そは個性の極美なり、人生の究竟の神也、光明と威力の體現なり、而して彼は藝術家なり、創造主なり、故に又一切の眞理と慧光とを創る。

然れども彼自ら大なる詩人なり、彼の宗教と道徳と眞理とは終に詩歌なり、そは哲學的觀念を以て人生を歌へるのみ。彼の哲學はさながら廊ろげなる夜なりき、されどもベクリンが「死の島」を照らして美しく輝ける星はみ空に懸りて、秘密を閉ぢたる淵を圍める岩角には月の光に酔うて百合の花咲く、「げにも我こそは森にして薄暗き木影の夜なれ、されど我が闇路を恐れざらむ者は其棺の木蔭に美しき薔薇の花を見む」。然り彼は詩の國に憧たる哲人也。超人の島のいかに詩歌の美と光とに飾らるゝかを見よ。

此の如くにしてニイチエは逝きたりき、日没に於て「自らの幸福」の終りを見て自由なる死に憧れたる彼は遂に狂して逝きぬ。早き死と永き戀の外に天才の死すべき道は唯狂なればなり。彼は誠に海の如く神祕にして、海の如く恐ろしかりき、然れども海の如く美しく静かなりき。人は彼を狂せりと云ふ、然れども彗星の行

衝に似たりし彼の終りの偉大にして不可思議なる、將た何の語を以て稱ふべけむや、人は即ち之を狂と云ふのみ。あゝ彼の終りの何ぞ美しき。偉大なる者の死は尤も莊麗を極むるものなれば也。

五

寂靜の太空を下りて宇宙の神は今正に海に入る。餘光紅に尙天を染めて、唯彼の光明と威嚴の昔を語るのみ。かくて海や空や蒼冥の暮色を罩めて、世は亦太古の靜寂に還る。仰き見れば幽韻深く太空を染めて超世正覺の思ひ永へに深し、あゝ大なるものゝ死や、何ぞ尊き。

生を此の世に享け業を此世に爲す、これ死せむが爲めなり、人生の問題は如何に死するかあり、死にして偉大ならすむば生の大なる、何かあらむや。

嗚呼我は亦死せざるべからず、旭日の榮譽は願はず、我は寧ろ夕陽の終りを願ふ、願はくば神よそを許せ。

日已に沈む、平和と寂靜の間に日は沈む、神の如きものゝ終りは常に此の如きものなりき。嗚呼活動と事業と建國の偉大は美なり、然れども知らずや、其入滅の更に壯大雄麗を絶するに若かざる也。

(三十七年八月)

吾等の理想的人物とは如何なる人ぞ

吾等の所謂理想的人物とは如何なる人ぞや。答へて謂はむ、彼は現世の人に非ざる也。よし彼の身はこの地この世に於いて活きむ、されども彼の靈は常にかの世のものなり、星のあなたみ空を遠き永劫のあなた、尙名も知れぬかの世のもの也。あゝ彼はこの世の人にあらざるなり。かれは常に空のあなたに自らの故國を懐ひ、其處に自らの世界を創り、そこに自らの理想を描いて、そこに自らの神に祈る。あゝ、彼はかの世の人なり。彼はさながら身と肉に結び附けられて天界の故國より闊濶うして光薄きこの地この世に投げられたらむ如きものなり、しかも彼はその何の故なるやを知らざるなり。かくて彼はヘフェストースの如く永しへに痛めるものとなりて更にプロメトイースの如く大なる鐵鎖もて現世の世界に永しへに繋がるなり。

然り、彼は繋がれたるなり。世の人の稱ふべき生命は彼にありては鐵鎖なり、現實は即ち其肉を裂くべき鷲鳥なり。然り、彼は投げられたり、彼は永しへの傷を負うて、常に煩ひ常に惱み常に悲しみ常に思ふ。かくて彼は常に憂鬱なり、非現實的なり、厭世的なり。然り、實在は彼にありては絶大の苦悶に外ならず。

あゝ、彼はこの世の人にあらず。この世この生、これ永しへに彼の敵なり。故に彼は如何なる時、如何なる地に於ても自らの慰ふべき地を知らざるなり。かくて彼は常に漂浪の人となる、而かも旅行く人にあらざる也。彼は現世に於て何物をも見ざるなり、彼はたゞ知らぬ故國を夢むのみ。

パイロンは正しく此の如き漂浪の人なり。母を棄て、故國を去り、海を渡りて以太利に奔り、雲を蹈みて瑞西に憧れ、忽ちにして劍を執つて希臘獨立軍に投じて死す。ナポレオン大帝も亦此の如き人なりき。コルシカの島を出でし彼れは忽ちにして皇帝の位に上りて歐洲を震駭したり。彼は炎熱の埃及に入り、三尖塔の下、四千年の昔を夢みて「ヴェルナル」に涙を灑ぎては、忽ちにして冬モスコの氷雪を枕にして運命のはかなさを偲ぶ。朝に萬乗の榮華をば擅にして世界を左右しては、夕に波荒き沖の小島の人となりて運命と共に逝く。あゝ、何ぞそれ夢の如くなるや。然り、彼は常に夢を追ふの人なりき。シエレーも此の如き人なりき。若きゲーテも此の如き人なりき、ニイチエも此の如き人なりき、ベックリンも此の如き人なりき。

げにや彼は漂浪の子なり、彼はたゞかの世を夢む。故に空想は唯一の彼の生命なり。而して神祕は常に其空想の子なり。かくて永しへに解くべからざる運命

によりて現世に繋がれたる彼は、空想と神祕との二つの翅によりて實在を超越す。かくて彼は初めて目の前にかの世の神を仰ぎ、かの世の人を見、かの世の樂しみを享く。

かくて理想の世界は彼の前に現はれ、光明の天地は彼の前に横はる。見よ、故國は現はれたり、光明は天に溢れ、微笑みは地に満ちて、六花繽紛芳薫郁として、一切の天人正に永遠と神徳を讚美す。此の如くにして實在の憂苦は初めて通るべく、靈は初めて自由なるべく、平和と淨寂と涅槃とは初めて人生の上而降らむ。

君知らずや、藝術とは即ちこれなり。藝術は誠に彼の空想と神祕の子なり。藝術は誠に所謂妄想によりて彼の囹圄の壁の上に描かれたる幻像に外ならず。あゝ、君よ、投げられたる人は已に病的なると共に、彼の言動と存在と藝術の常に病的なるを怪しむ事勿れ。

あゝ、神々は已に死したり、トリトンの笛の音は永はに止みぬ。プラトーン已に逝き、基督已に逝き、パイロン已に逝き、ハイチ已に逝き、ショーペンハウエル已に逝き、ニイチエ已に逝き、ベックリン亦還らず。あゝ、何れの日か、吾等はまた理想の人の前に跪き得べき。

吾等は吾等の故國の何處なるやを知らず、吾等の父母の何人なるやを知らず。

杖なき盲目の人の如く、吾等はたゞに憐むのみ、知らぬ故國に憧るゝのみ。
 夜毎、こゝには變らぬ星の光を仰ぎ見れば、かの菩提樹の蔭に潜みて生命の越
 し方行く末に煩ひたりし昔の人の哀れなる憐みを今更に思ひ出づる哉。光なき
 我世に於てさても短き命を頼みて、あゝ何日迄か吾等は東方の曙光を待たざるべ
 からざるか。

三十七年一月

最大の悲哀

吾等の最大なる悲哀は蓋し性質不變化の説の右に出でじ。吾等の資質と運命
 と歸趣が果して歴史と進化と統計の上に永へに超越する能はずむば、吾等は遂に
 今日の存在に堪へざるなり。

光載せつゝ、空行く雲の、うもいかに美しきよ。露を帯びては秋の愁を待たで、暮
 れ行く春と共に永しへに散るかの野の花のいかに美しきよ。露に酔うて光に酔
 うてたゞ天の榮光を歌ふかの森蔭の小鳥のいかにたのしきよ、あゝ、もし吾等にし
 て永しへにかの雲となり、かの野の花となり、かの森の小鳥となり得る能はずむば、
 吾等は遂に今日の生活に堪へざるなり。

かの虹の影に美しきイリスの女神を見、かの明けがたの空にオーローラの姿を

仰ぎ、かの春の野に美の女神の逍遙を偲び、かの泉の音にニンフの歌を聞き、はては
 かの傷きて死せる若き人の血汐よりまのあたり望と驚微の花の艶ひ初めたる去
 にし世の、いかばかり懐しく羨ましきよ。あゝ、もし吾等にして永しへにこの世に
 棄てられて、またかの神々と共に世を共にする能はずむば、吾等は遂に今日の世界
 に堪へ能はざるなり。

昨夜に變らず、今宵もまた同じみ空の星影を見るは吾等にありて誠に限りなき
 憐みなり。去年に變らず、今年もまた同じ一つの追懐を偲ぶは、また吾等の常に煩
 ひとなす所なり。然り、歴史と科學と過去の屈從は、げに吾等の最大苦痛なり。

吾等は此の如き苦痛に反抗す。作爲により冥想によりて、此の如き苦痛と煩悶
 を離脱せむは、これ實に吾等の存在の意義なり。あゝ、もし夫れ吾等にして神祕を
 離れ、夢幻を離れ、憧憬を棄て、永しへに人類發展の命運を辿り以て實在の世界に
 執着せざるべからずむば、吾等は寧ろ慟哭してこの生命を斷たむのみ。(同上)

理想の世界

人生の理想は善なるか、將た真なるかは吾等之を知らず。宇宙の歸趣は善なる
 か、將た美なるかは吾等之を知らず。人生の惑ひなるか、將た疑問なるかは吾等之

を知らず。宇宙は零碎なるか、將た謎なるかは吾等之を知らず。

人何ぞ逡巡するや。眞理は發見すべからず、唯創るべし。理想は搜し出すべからず、唯創るべし。哲人曰く「み空の星の零碎によりて、我は一つの世界を創りたり」と。あゝ吾等は自らの力によりて創らざるべからず。かの光明の世界と平和の理想とは即ちかくて自らのものならむ。是に於て、かの宇宙とこの人生を以て自らの世界と理想とを説明し註釋せよ。此の如くにして人生始めて價値あり、世界始めて意義あらむ。

(三十六年六月)

理想の世、理想の人

我は厭世なり、憂鬱なり、世の微笑みの兒にあらず。

我は夢む、理想に憧る、されどもそはこの現世のものにあらず、そはたゞに我等心靈の法鏡に宿りたる大我の幻像のみ。詩人の心情に現はれたる藝術の世界は即ちこれなり。嗚呼身と肉とを滅して、吾等は初めて理想的光明の樂園に想ひ入るべけむ。

我はもろく、の人に飽きたり、この現世の女より生るべき男と女は、終に我理想の人にあらず、理想の人は常に詩人より生れざるべからず。吾等の戀ひ憧るゝ少

女はこの世の人にあらず、そは常にイブの如く、バラス・アテチの如く、偉大なる男性より生るべし。グレートンヘンは即ち然り。イヒダニエは即ち然り、ベアトリーチは即ち然り。嗚呼永久に我等が生命の光となるべき「久遠の女性」は、唯に詩人藝術家の大なる理想によりて創られむのみ。

神よ、生れて詩人たらずんば、願くは詩と美とに酔うべき思ひを我等に恵め。あなたの空と世を遠く憧れて、詩と美と光との國に、且つ思ひ且つ戀ひ且つ慕ふ、これ我等の生命なり、實在也。

(三十七月四月)

嗚呼 フランチェスカ

(ワッツ筆「バオロとフランチェスカ」に題す)
 (ダンテの『神曲』中『地獄行』第五章参照)

野の花は色を以て生命となし、森の小鳥は歌を以て生命となす。共に夕月の露に、共に朝風の清けさに、光と榮へに神の心を懐しむ間に、嗚呼いかなればフランチェスカよ、我世に於ては唯一の幸なるべき戀の光の、いかなれば永しへの罪と苛責とはなりにしよ。彼にありては光は仇なりき、神の情は殃なりき、希望は呪ひなりき、彼にありては生命はかくて死なりき。おゝフランチェスカよ、げにや「懐しかりし折の面影が、今はなかく」に不運の罪の煩ひとなりて残るこそ、世にも又なき惱みなれ。嗚呼、フランチェスカ、哀れなる乙女かな、彼女は戀の見なりけり。イリスの女神が其柔き五彩の虹の紅と緑を以て、夕暮空の森影にて涙を以て描きたりし姫百合の姿は正に彼なりき、彼は清かりき、美しかりき、艶なりき。然れども野の繁げみには、蛇住むを見ずや、彼の生れたる世は誠に詐りと罪惡に充ちたりき。かくてかれは欺かれて其父に脅かされて強ひられて、恚醜く心虐ごき恐しのマラテシタの妻となされたり。何事ぞ、野の花の麗しさを踏み躪る惡魔は誰ぞ。

然れどもフランチェスカは既に戀の見なり、神の心なるべき戀と微笑みと光は其の生命なりき。かくて彼女は戀人を見たり、マラテシタの義弟なるバオロは彼、あはれバオロや、美しく雄々しき神の若さにも似たる兒よ、かくて二人の戀は成りぬ。ある日なりき、若葉繁れる窓の下、二人はさながら懐かしの鴿の如く相並びて「ランセロット」の曲を読みぬ、そは寂びしき夕なりき、二人の外には何物もあらず、人を避け疑ひを避けて彼等は唯さながらに自らの戀の世界に住める也。二人はかくて巻を読みぬ、そは美しき戀の曲、彼等の心は微笑みに崩れたり、彼等の心は相共に鼓動したり、彼等は今や詞なかりき、然れども其四ツの眼の、いかに暖に愛の光に輝くよ。憧れの思ひは今や一つになりて二人は共に抱きながら相俯しぬ、さながら融けたらむやうに、嗚呼今や彼等の唇は一つになるよ。これや聲なき思ひの詞、見よ、遠く、二人の心霊は相擁して今や光明の幽境に翔り飛ぶにあらずや。げにや二人は永しへの一つなりしを、これぞ二人の神より受けし命なれ。嗚呼哀れなるフランチェスカ、されども彼女は已に人の妻なる名を受けしにあらずや。現世のあらゆる罪なる詐りの刃を以て彼女は已に妻なるを強むられしに非ずや。かくて二人は見出されたり、彼等は今や我世の罪人となりけり。マラテシタはさながら怒り狂ひながら刃を放ちて遂にフランチェスカを刺しぬ、バ

オロも亦殺されぬ。嗚呼二人はかくて永しへの生命の爲に其身を終えぬ。哀れならずや。

然れども二人は遂に罪の人なりき世のあらゆる罪惡の汚名の下に彼等は共に社會より斥けられて、將た宗教より放たれて、さながら土塊の如く野に棄てられつ。み空の神、情けありや否や、鶴の如く清き二人の兒は、かくて今や地獄の暗黒に投げられはてぬ。

こゝや地獄の奥、二人はかくて苛責と罪の子となりぬ。此處や地獄の奥、見よ其處は光黙して暗闇の怪雲はさながら嵐荒れたる大海の面の如くに蕩揺して渾沌の中に漂ふのみ。戀の爲に身を破りたる幾百の精靈はかくて此暗黒の中に溺れながら逍遙ふなり。冷かなる渦きの風に送られながら、あるは深淵の闇路に沈み、あるは巨巖の絶壁に打ちつけられて、彼等は凡て惱みつゝ迷ひ漂ふ。悲嘆の聲苦悶の聲懺悔の聲も、そを聴き給ふべき神さへ在さぬ此の地獄には、今はなかく細り果て、遂には吐息となり喘ぎとなり呻吟となりて闇に渦く風の中に没し終る。四天今や唯愀々の死響を聞くのみ。そこには一の希望なく、涙なく、休みなく、暖さなし、そこには唯生きながらの死あるのみ、死ながらの生あるのみ。

嗚呼哀れなるバオロとフラテュスカ、彼等二人は今や此の如き地獄の奥に棄て

られたり。相抱きつゝ、しかも今は涙なく微笑なくて二人はさながら鶴の如く相抱きつゝ、しかも辿るべき巢もなく、この愀々の黒雲に漂ひながら迷ひ行く。見よ、彼等は幻の如し、影薄すく姿瘦せ、顔蒼白うして目は四みて閉ぢぬ、頬には一の紅もなく唇には一の微笑の跡なし、涙も今は枯れ果て、悲嘆はやがて喘ぎとなりぬ。沈黙の中に不安の中に彼等が情熱は凡て氷り果て、血もなき聲もなき煩悶と苦悶とは冷かに残るのみ。あゝ薄すれ行く彼等の影の、そもいかに哀れなる、これぞ二人が永しへの戀なる罪の報ひなる。

然り、彼等は永しへの罪人なりき世に光あれど其光は彼等の大なる罪を輝らすにはあまりに弱かりき世には神あれど、此の如き人を救ふ爲めにはあらざる也。罪は彼等にあり、あゝ罪は果して彼等にあるか。

思ふ、太初にありて我等唯靈のみなる時には、神と共に我等の生命は自由なりき。然れども神は晝と夜を分ち時と處を別ちて、水と土とによりて我世を創りてより、世は太初のをれにあらざりき。我れ等の魂はかくてちり／＼にこの世に落ちて物によりて初めて存在す。あゝこの物や、光の子にはあらで夜の子なり、暗路の子なり、かくてそは魔となり業となりて現はれて我等太初の靈を凡てのものより分ちたり、我等の靈の相求めて一となりて、同じ太初の道に還らむ折にも常にそは妨

げとなり禍となる。而して魔の力を怖るゝが故に世は此の如き禍をば罪と呼びぬ。あゝフランチェスカよ、彼女はバオロに於て自らの魂の影を見たり、彼を戀ふは即ち自らを求むるなり、太初の道に歸るなり、神の心に還るなり、然れども今やそは禍となりぬ、而して世は彼を罪人と呼びぬ、此の如くにして彼は果して罪なりしか。

夫れ心靈の相別れて世に墮ちて下りて、物質に依りて初めて現はれざる可からざるに到れるはこれ正しく大なる悲惨なり、誠や物質は心靈に對する大なる苛責に外ならざれば也、『世界悲劇』は此の如くにして起る。而してフランチェスカ、彼女は誠に尤も大なる物質と現世の苛責を受けたりき、尤も悲惨なる世界悲劇を過ぎたりき、嗚呼彼女を罪と呼ぶ遅い哉、然り、罪は戀にあらすして、世に現はれたる事にあり、罪は即ち人たる事に存す。

人たるが故に即ち罪あり、此くの如くにして光無き地獄に下る、嗚呼フランチェスカ、何等の悲惨ぞ、彼の苦しみは即ち戀の苦しみにあらで、人生と世界そのもの、永遠の惱みにあらずや。嗚呼フランチェスカ、爾今も尙ほ久遠の闇黒の蕩搖の中に、夢もなく目覚めもなく、思ひなくて悔の惱みつゝあるか、あゝフランチェスカ、我も亦人なり、今茲に此の世にあるを如何。惱みて我も亦沈まざるべからざるか。

然り、人生は悲惨也、肉と物とに結ばれたる我が靈は亦この肉と世の大なる苛責を受けざるべからず、永しへに神に還らむには人は先づ此の如き永しへなる苛責を悟り終らざるべからざる也、嗚呼還元は道遠し、人生の逆路は峻にして又幽なり、さらばかの花影に酔ふて暫しの戀に夢みむより、我は寧ろ幽冥の闇路に下りてフランチェスカの惱を分たなむ、爾フランチェスカ、可ならずや。これぞ眞の人生の運命なる。

(三十七年十月)

ワッツ筆『希望』(Hope)に題す

疲れ果てたる『希望』の女性は蒼き衣を纏ひつゝ、獨り寂しげに破琴を抱きながら、半ば暗雲に埋るゝ地球の上に坐す。時や夕暮、暮色蒼然、既に遠くより通り來りて天地今や暗澹たる寂寞の中に沈み行く。空に唯一つの星懸る、然れども彼女は目隠しせるを如何にせむ。嗚呼君よ、暗闇に坐する人の嘆きを見よ、何れの時か彼等は果して明日の光を仰ぎ得べき、世は今や暗黒の中に沈み行く、あはれなる彼女かな、これや誠に我等が『希望』の姿なるべき乎。

然れども星は閃く、彼女は破琴を執る、最後の一絃尙殘る、金鈴の響尙存す。彼は彈す、彼は黙す、彼は唯聴くのみ。金鈴の響尙存す、これや希望の聲、嗚呼彼女は微笑

むよ、而して空に星の懸るを見ずや。

一絃尙残る。これや誠に希望。げに其絃の響かむ限りは世は正に嘆きの谷にあらで樂園なり、一切の惱み、一切の悲しみは唯これあるが爲めに忘るを得べし。人生茲に於て乎、生命あり、價値あり、光あり。

嗚呼天に星、人には希望。夜はさらば更けよ、星は更に光あらむ、人には限りなき嘆きあれよ、「希望」の絃には更に麗しき響あらむ。嗚呼世は今や暗黒に沈む、然れども悔ゆる勿れ、「希望」の聲は遂に新たなる光と明日の來るべきを教ゆる也。

(三十七年九月)

ワッツ筆「幸福なる戦士」(Happy Warrior)に題す

若き戦士は斃れたり、其兜は名譽ある額を離れて劍は已に手より落つ。目は深う閉ぢ、頬は色萎め、息は幽かになりて、彼の魂は早や幽冥の境を辿る。世界の聲は既に彼の耳より消え失せて、浮世に於ける何物も彼を煩はすものあらず。此の時や、我が世のものにも似ざる麗しく尊き女性の面影は、徐に光明の中に現はれて、靜かなる彼が最後の思を辿りつゝ、彼の耳に囁きぬ「爾勝てり、爾勝てり、さらば辿らむ、神の御國」と。嗚呼これや天界の聲、今や彼は唯之を聞く。而してこの懐しき女性

は誰ぞや、彼が自らの理想の姿即ち是れ。

彼は誠に勇士なり、彼は激戦の中に奮闘す、生命は彼にありて何物にもあらざる也。世或は之を狂と呼ばむ、然れども彼は唯誠なり、自己の信する所を爲すのみ、自己の理想は即ち最上の帝王にして光明なればなり。かくて彼は斃る、其處には世の爲めの名譽もなく、人の爲めの義務もなく、唯自己の確信と是認と威權とのみあり、何の悔ゆる所ぞや。嗚呼彼は斃る、世界と萬有とは地上の聲と共に塵の如く煙の如く消え失せて、靈は正に自己の理想の面影を辿りつゝ、身心今や共に天の光明に融けて去る、平和茲にあり、榮譽茲にあり、人生の意義茲に絶す。嗚呼これ「尤も光榮ある存在」にあらずして何ぞや。

(同) 上

お、我友よ

お、我友よ、微笑み酔ひし花は散りて、青葉の木蔭に物思ふべき時となりぬ。うたてや、見はてぬ夢の限りなく惜まるゝに、昨夜の花の見るかげも無う散りて逝くよ。

お、我友よ、しばし思へ。緑濃き若葉のかけ、清き小川の邊に立ちて限りなく來む世のたのしさと光ある理想に憧る間に、流れと共に行末も知らず別れ逝く望の花を忘るゝ勿れ。あゝ、美しき花は散りぬ、夢は覺めぬ。お、我友よ、あしたの空に流れ行く雲を見よ、我世の別れの如何ばかりつらかるべき。

嘗ては我が心の中にも清き戀は花の如く微笑みつ。尊き愛も望みも星の如くに閃きつ。されどもそは歸らぬ昔なり。花や逝く、愛や別れし、望や消えし、而かも我はその何處に逝けるかを知らざるなり。あはれことしの花も散りて、乙女も今は來ずなりぬ。人はたゞ新しき緑の姿に憧るゝなり。されども散りて行く花びら毎に、深き愁の描かれたるを誰れか知る。

お、我友よ、かくて我望みも戀も微笑も、暮れ行く春の恨みと共に消えて行きぬ。

人にも知れず、幽深き夕暮に迷うて歸らぬ流れと共に消えて逝く花や望や、あゝいかに哀れ深き。

(三十六年五月)

二

を、我友よ、我は嘗て多くの人によりて愛せられき。されども、呪ひ惱みの言葉を口にし、罵り憎みの言葉を筆にしてより、世の人は凡て我を避け、我を嘲り我を棄てつ。

されども唯一人、あゝ我を戀ひ慕ふ唯一人の君は、さにあらざりき、我れ惡しき人、汚れの人となりし時、彼女はいよゝゝ我を愛しぬ。呪ひの語を叫びたる時、彼は愛に燃えにし其美しの唇を以て我を吻ひぬ。憎みの語を書きし時、彼は妙えなる暖き思ひをこめながら、其清き手もて我手を握りぬ。かくて彼が麗しき戀の思ひは、春の泉の如く夏の晨の露の如く、惱める我心の上にながら新しき命となりて溢れ來つゝ、我胸は初めて清くなりぬ。我思ひは初めて暖かになり、我は初めて美しく尊くなりぬ。あゝ、友よ、詐の世の人の前には我は惡魔ならむ、されども此の戀人の前には、神の御前に立てるが如く、我は限りなく清く善き人なり。げに我のいかなる人なるかを知るものは、あゝ、たゞ神とこの戀人とのみ。

戀や此の如く尊くなりぬ、愛や此の如く世界となりぬ。お、我友よ、我伴て大なる詩人が『我世には戀よりも尊きものあらず』と言ひにし言葉を見たり。されども我は今初めてその何の意味なるやを悟り得たり。

(三十六年六月)

三

お、我友よ。夕べ静けき森のあなたに逍遙ひて、夢にも似たる木蔭に立ちつゝしつゝ、み空の星に思ひ入る時、我は寂びしき聲を耳にしたり、あゝそは自ら愁へたる太息なりき。

お、我友よ、今朝緑濃き白露を踏みて、曉の光にほくゑめる小百合の花を手折らむとき、花悉く露けきを見たり。あゝうは半ば我涙なりき。

愛を慕ひ光を慕ふ身のいかなればかくも煩ふや、あゝ我は今自らの胸の中に、恐ろしく黒き影を見ぬ。

昔オレステスと呼ばれたる若き人ありき、父の仇を報ひむがために己が母を殺したりしが、はては怖ろしき地獄の悪魔に襲はれて、遂に彼は野山わけく逃げて行きつ。されどそは仇なりき夢にも目覺めにも、悪魔は鋭き刃をもて常に彼を責めつ。まこと、そは悪魔ならで自らの心に外ならざりき。

今年の若き人の煩ひも亦此の如し。彼の心を苦しめ振ましむるものは、他にあらで彼の心自らなり、彼はたゞ自らの心と共に、且争ひ且惱み且戦ふのみ。げにも若きは、悪魔にも似たる罪なるをや。

我は常にこれが爲に煩ひ、この罪とこの悪魔を憎む。お、友よ、されば悲め。この恐ろしき敵に打ち克ちて、我心が永はに微笑みの境に入らむ時は、げにも自らの死にあらずして何ぞや。自らの敵はこれ自らの心なればなり。 (三十六年七月)

四

お、我友よ、月涼しき夕暮に南と北とに相別れてより已に三十日を越えたり。月は復圓どかになりぬるよ。あゝ我は此處南のはての磯の上、友無く獨りあした夕べに潮と雲に思ひを托して、人を夢み友を夢み世を夢みしこと幾度ぞや。

潮の旋ぐる巖に上りて今日も我は夢みたり。夕暮となりぬ。潮と雲とみ空のはて、今静かなる紅に艶ひ閃く其間を夕日静かに落ちるを見ずや。紫蘭の色は凡て疑つて、今静寂の影となりつゝ、戀にも似たらむ其光明を世に投げて、沈み逝く其夕日の美しさをば、あゝ唯かの若うして理想に酔うて別れ逝く若き人にもみ替へ得べけむ。まだ若く潔き戀と理想の面影を世に残して、あゝ彼は逝くよ、あゝ彼は

沈むよ。

ハインネの巻は手より落ちつつ、我は静に泣きそめぬ。君よ答ひる事勿れ。あゝ世にも悲しきは年若き人の早き死なる哉。人生れぬ故に人は死す、我寧ろ悦ぶ。しかれども若き人の理想と活動と事業と戀は如何にすべき。限りなき追憶と哀悼と涙と愛と何かあらむ。見よ、彼の胸に秘したる若き心と靈と活ける理想と詞とは、あゝ神も知るよしなくて、永しへに閻路の底に葬らる。あゝ彼は逝くよ、彼は沈むよ。彼が尊き理想と戀とを如何にすべき。

日は沈みたり、紅艶ふ其光と影とは、さながら忘れはてたらむやうに皆消えて行きぬ。涙と潮の音の残れるのみ。然れども君よ沈める夕日は旭となりてまた次の日には昇り來む。然れども君よ、若き人の逝けるは終に歸り來らざるなり。逝ける理想と戀と若さと夢とは、あゝ永しへに還る可き期なからむ。(三十六年九月)

五

おゝ我友よ、秋の世となりぬ。もの昔秋風に痛む世となりぬ。思ふ去年の初秋、君と相携へて江戸川の邊に行みき。流れなきに流れて行く捨小舟、風なきに揺ぎて動く萩の葉末、語なくして君と我と、たゞ相共に痛める秋を相思ひつ。又思ふ今

年の春箱根路深く迷ひ行きて、緑の蔭、霞流るゝ森のあなた、風や囁く泉のほとりに
 語なくして君と我と、たゞ相共に惱みの春を相思ひつ。思へば今更に惜しき昔の
 惜まれて、偲ぶ想ひの懐しき其折々の夢もなか／＼見果てぬまに、又秋風に目覺む
 べき時となりしよ。あはれ夢のなかにも秋風の吹いて、なつかしき昔の思ひも
 花の如くに散り果てゝは夢の中にも入らずなりぬ。

秋は寂びしくてや。おゝ我友よ、窓側の芭蕉の葉は見るかげもなう破れはて、前
 裁の芙蓉の花は昨夜の嵐に残り無く散りて落ちぬ。今静かなる夕暮の空、仰ぎ見
 れば白雲佇みて行衛に迷ひ、耳側れば暗にひ／＼く落葉の音目を閉ぢれば、涙おのづ
 から頬に流れて、胸の奥にぞ幽かに返す響や何に。

秋風の世となりぬ。おゝ我友よ、哀れげに枯れて落ちるは、唯花のみにてはあら
 ざりき。過ぎにし夢と微笑みのあとを数えて見よ、あゝ秋風に惱むものは、獨り花
 と野とのみにはあらざりけり。

(三十六年十月)

六

おゝ我友よ、久しい哉君と相語らざりしことや。されども許せ、我はまた世を避
 け人を避けて、且暮漂浪の客となりたり。紅葉美しき秋の末、小湊綾の磯に徘徊し

て足柄山の夕雲に君が詩神を偲びし時、我は遠く北に送けて吹雪烈しき津輕の海を夜半に越え、人無く友無き胡地のあなたにたい寂寥を友としたりき。

お、友よ、いかなれば我はかくうとまじき身となりけむ。光と情は煩はしきものとなり、冷かさど苦しさど悩みど闇路とは、この上もなく懐しきものとなりぬ。寂寥はかくて我にありては、白百合の花を携へて夕日の影に物思ひつゝ、我戀人にも似たらむ女神の如くなり。嘗ては恐ろしかりし死の神は、今や花環を手にしつゝ、瘡せにし頬に微笑を湛へて、來れ我子よと宣給ふかの世の母君の如くなり。

思ふ、去年の春夢を帯びにし月の夕暮神の愛を教へ給ひし君が言葉は今も尙我が耳に残りぬ。されども君よ、西と東のあるを忘るゝ勿れ、日と月と、光と闇のあるを忘るゝ勿れ。あゝ我は寧ろ西に流れて月と闇路を辿るべき泉の如けむ。

お、愛と光か、我は限りなくを慕ふ。お、「微笑みのあつき情」か、我は限りなくただを慕ひぞを思ふ。されども我にありては、それは限りなきあなたに輝く星の光のそれなりき。星は永しへのあなたなり、遂に到るべからず。我は光弱きこの世に立てり。見よ、嵐と雲と煩ひと愁へとの、あまりに我に近きをいかにせむ。お、我友よ、げにもうたてき身とはなりしかな。光を避け情を避け微笑みを避けて我はそも何處迄迷ひ行かざるべからざるか。見渡せば、愁と雲のはてしもあ

らぬ、我行く方や誰か知るべき。

(三十七年一月)

七

お、我友よ、戦の世となりぬ、そは我が佇む世にあらす。我は思ひの子、隠れざるべからず。

かくて我は寂莫の中に潜みぬ、語るに友あらず、歎くに友あらず、我はたゞ自らの心に問ひては答ふべき道あるのみ。夢と涙はかくて此上もなき友となりぬ、嗚呼、今に於て我は寂しき、静けさの如何に甘きものなるかを悟るを得たり、我は寧ろ喜びとなす。お、友よ、我をしかく幸薄すき兒となす勿れ。

世の亂れを外にして春はまた廻く來りぬ、美しの春や、森の木蔭にさまよひつゝ、手に摘みながら、此歳またかの人を思ふべき、萱の花は萌えそめぬ。さても懐しき春の日や、よし美しかりしかの夢と微笑みの永しへに廻り來む時はなくとも、我は復還り來る春の榮光に輝かれては、清き愁の賜物をば深く神に謝せむとす、さてもゆかしの春の日や。

春は來ぬ、春は來ぬ、さらば友よ、かの流れのあたり、花蔭の夕暮に獨り逍遙よひつゝ、人にも告げぬ愁に酔うて、いざさらば思ひのまゝに我は泣かなむ。清き悩みと

八

静けき涙と寂びしき愁へとの、そも如何ばかりゆかしかるべくや。(三十七年三月)
 お、我友よ、我は深山に隠れたら、深山の春やいかに甘き。谷川の流れ、峰の霞、春の微笑、春の光、今も昔に變らじな。

あゝつれなくも別れ來し哉、あまりに甘く尊き愛の微笑にも堪え兼ねて、春の情を仇にして愁に辿り涙を慕ふて、知らぬ山路に憧れし身の、あはれ今更に寂しくてや。

我は幾度か夢みけむ。されども思ひのみたも重う沈みて、夢はなか／＼に結びもあえず。夜深うして獨り泣く時、開を忍ぶ谷川の流れと共に月の光に融けて流れて、あゝ我が思ひのいかばかり都の空に憧れけむ。開路を辿る我思ひ、休みもなく憩ひもなきお、我思ひ、されどもかの君は知るや知らずや。

然り、そを知るものはたゞ友のみ、憧れを知る人のみや、唯我が煩ひを知るべけむ、然り、我友のみや、我が煩ひを知るべけむ。さらば我は忍ばむ、アトラスの如く我は忍ばむ、忍ぶものは幸あればなり。友よ知らずや、現し世は短し、來む世は長し、我世に於ける別れの短さを我は悔むと悲まじ。お、神もみそなはせ、戀と光を共に命

と誓ひにし二つの魂の、遠き遠き來む世の神の國に於て相遇ふすべのなからでやは。

(三十七年四月)

九

お、友よ、君と相語らざる久しい哉、壇の浦曲の朝な夕な、沈む夕日に憧がれて、浪の音と千鳥を友なる我友よ、幸くありや。我れ先にワッの書幀を送りぬ、受け給ひしや。彼も亦夕陽の如くに逝けり。今宵我れ復た孤燈の下、彼が「愛と人生」の前に坐して、頬に自ら涙流る。君よ脆しと云ふ勿れ、嗚呼我生は「人生」の如く瘦せて危げなり、然れども何處に「愛」ありや。

思へば壇の浦の浪風、今も昔に變らざらむ。此處や、昔平家榮華の夢をばはかなき夕映に委せ置きて、運命の波路に生命と心霊とを葬りし地、詩人の感慨それ如何。思へば美しきは平家の終りなりし、死と滅亡とを知りながら、尙運命の神意に其身を任せて、驚かず怖れず、晨には笛を奏して星影の淡きに憧れ、夕には夕月の薄すき光に涙あり、然れどもそは詩神の賜ひし涙なりき。而して彼は流浪の身となりて、處定めぬ梶枕、友呼ぶ千鳥に船を委せて、一族悉く遂に壇の浦曲の海底に没す、人は其脆きを憫む、然れども微笑あり、自信あり、彼に於て何かあらむや。ワッの筆に成

りし『幸の勇士』は正しく彼なれ。
 美しき終り哉、自らの理想の聲の囁きを聞いて今正に逝く、其面には悔あらず、煩
 ひあらず、平和と微笑は唯其眼を閉さすのみ。あゝ『幸の勇士』思へば美しき終り哉。
 我生已に危うし、我れも亦死せざるべからず。夕日の如くさらば沈まなむ、され
 ども神は果してそを許し給ふべくや。
 (三十七年九月)

無 題 録

一

永却萬有の流轉に於て現世は一刹那なり、現世に於て相別るも刹那なり、相遇ふ
 も亦刹那ならずや。

別れの戀に泣く人よ、さらば微笑め。かの戀人の手を擁して、甘き恵みに酔ふ人
 よ、さらば亦花蔭に往いて我世の人の薄すき命を泣かばやな。知らずや、相遇ふも
 亦刹那なるを。

二

物置れる人の言の棄こそさてもこらたけれ。戀とは何ぞや、心靈の先天的融合
 即ちこれ也、思ふ、昔、吾等の靈が尙肉の此世に生れざる時ありき、其時よ、吾等の靈は

自由なりき、神と共に常に等しき運命なりき、吾等の思ひと言と行とは亦神の如く
 常に一なりき、かくて吾等の靈は常に一なりき其處にたゞ一ありき。この一つな
 るをば愛とこそ呼べ。然れども世と神とは老いてなりき。吾等は何の故なる
 を知らず、唯老ゆるのみ。かくて神と人と離れつゝ、剩さへ吾等の靈は肉と共にさ
 れ、くゝに結びつけられて、奈落の間を通じて投げられぬ。かくて一つなりし靈も
 され、くゝに別れつゝ、凡て半ばなるもの世に現はれぬ、これをこそ世に生るゝと人
 は云へれ。あゝ思へば遠し、かの世の命、靈全かりしかの世の姿、思ひ見れば唯香と
 して夢もなかく、通はじな。更に思ふ、我が伴たりし靈のありかは今何處ぞや、吾
 等知らざる也、さびしからぬやは。

然れども吾等に尙一つの悦びあり、吾等は今も尙神の子、神に等しき命、尙吾等に
 あり、何ぞや、戀即ち是也。戀とは何ぞや、吾等が伴たりし他の靈を見出すなり、かく
 て吾等は始めて全き靈となる。あらゆる肉の苦と罪とを脱して、美しき昔の神の
 世に歸りて、心の永しへに蘇み返るべきは、嗚呼たゞ戀の路の一あるのみ。

* * * * *

かの美しき眼の光と、薔薇の如き唇と、かの太息、かの涙、かの柔き二つの手は、これ
 吾等が心靈を語るべき大なる詞なり、そはたゞ心より心に、光より光に、思ひより思

ひに傳ふべきのみ。かの聲にて明かす言の葉の、そもいかに力なきよ。吾等の胸に潜みたる若き思ひは遂に語もて説き明かすによしなき也。あゝ知と言語とは何するものぞ。そは人の作れるもの、神の創れるものに非ざれば也。

さらば戀よ、そは靈の感應なり。そは既に知の前に、言語の前に、我世成らぬ前に、我れ人の生れざる前に存したるに非ずや。そはたゞ心より心に光より光に、血汐より血汐に傳ふべきのみ。あゝ知と理會と道義と戀と、何の關はる所ぞや。

目と光と涙は常に心靈の語なり、かの柔き手を握り、その温き唇に觸るゝ、何の罪かこれあらむ。

吾等は肉の美しさを稱ふ、そは心靈の詞なればなり、そを罪と呼ぶ、既に已に遅し。見よ、實相は現實と物とを假らずむば、現はるゝの道なきを如何せむ、吾等の心靈は肉と物とに依らずむば説き明かすすべなきを如何せむ、あゝそを罪と呼ぶ、既に已に遅し。靈の肉に結ばれたる吾等生命そのものゝ、已に大なる罪過なるを如何せむ。

三

昨夜我れ夢に麗しの人を見さされども、其人の誰なるやを知らざりき。

(三十七年五月)

君よ怪むこと勿れ、青春老い易し。今の我こそは三年昔のそれならぬをや。

(三十七年六月)

四

我れ戀人を離れてより笑ひを今や忘れたり。

笑ふ能はざる尙ほ忍び得む、されど涙も愁も夢をも忘れたるをいかにせむ。

あゝ此の如くにして尙ほ活きざるべからざる乎。

(同上)

五

身は燕心は雁よ。春逝いて我魂迷ふ、北の地の何處の際か、我れ自ら知らず。

今や若葉の陰、涼しき風、望の光さゆりの花、戀のほゝえみ。されども魂なき我身、

あゝ今更に何かせむ。

(同上)

六

あゝ我魂やそも何處、然れども君よ願はくは問ふを休めよ。

さらば見すや、夕雲の行衛を。峯を離れて後、消ゆるの何ぞ速かなる。

(同上)

七

嗚呼もし再び世に生れ得べくむば、我れ月見草とならばやな。夢の如き蒼白の月中空に懸る時がくて咲かむ。明け方の空月落つる時さらば凋まむ。一夜の露

の命我は悔むじ。
 おゝ神よ願うらくばそを許せ。蒸苦しき我世の眞査にはあゝく我は渡れ果てぬ。
 (同上)

11/9/40
 藝術と人生 終

明治四十年六月三十一日印刷
 明治四十年六月二十四日發行

藝術と人生

定價金九拾五錢

著 者 北齋 藤 信 策

東京市本郷區弓町一丁目二番地

發行者 宮城 伊 兵 衛

東京市麴町區紀尾井町三番地

印刷者 中 村 貞 臣

東京市麴町區紀尾井町三番地

印刷所 元 眞 社



發行元

東京市本郷區弓町(壹岐殿坂)
 振替口座七六七四番

昭 文 堂

大 賣 捌 店

東京市神田區表神保町

東京堂

同 日本橋區通油町

水野書店

同 本郷區本郷

東亞堂

同 日本橋區住吉町

至誠堂

同 日本橋區吳服町

北隆館

同 神田區表神保町

上田屋

大坂東區渡邊
振替口座貳八貳番

杉本書店

久留米市米屋町

菊竹金文堂

74
190

74

420

084707-000-0

74-420

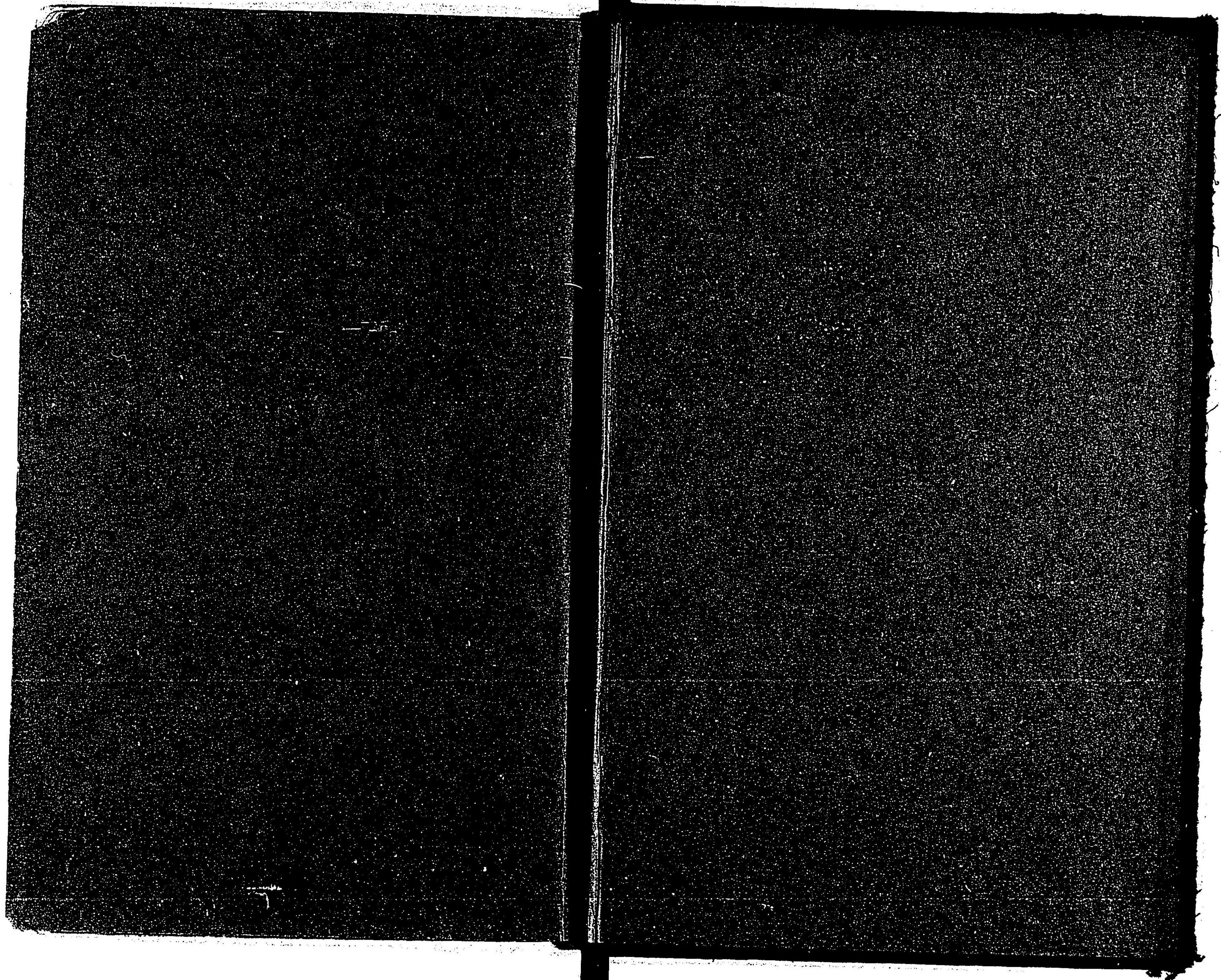
芸術と人生

斎藤 信策/著

M40

DBA-0031





74
1120